

# 通類媛

第九年新年號

長谷川  
國邦

昭和九年十一月廿五日 第三號  
昭和九年一月一日發行 (每月一號發行)



# 本瑪瑙帶留 オリジナル

## 進呈!



ハミング

ククリ

### 進呈方法

- 一、五十錢瓶の空函へ住所氏名を書いて本舗景品係へ郵送下さい(二十五錢の空函は二個) 御買上げの店へ出されてもよろしい
- 二、二十八様に一入當籤等外にはカオール(十錢包)全部進呈
- 三、御一人で何個でもお出し下さい多い程當籤率がよろしい
- 四、抽籤昭和九年二月末日迄に數回施行し其都度新聞紙上に發表します
- 五、抽籤に依らない最高特典(二十五錢なれば十二個)五十錢の空函六個を取りまとめ本舗に御送りなれば抽籤無く帶進呈します

原料香水オリチナル本舗 株式会社 安藤井筒堂  
衛生口錠カオール 東京市日本橋區水天宮前

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

# 芝居情緒と食道楽 喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

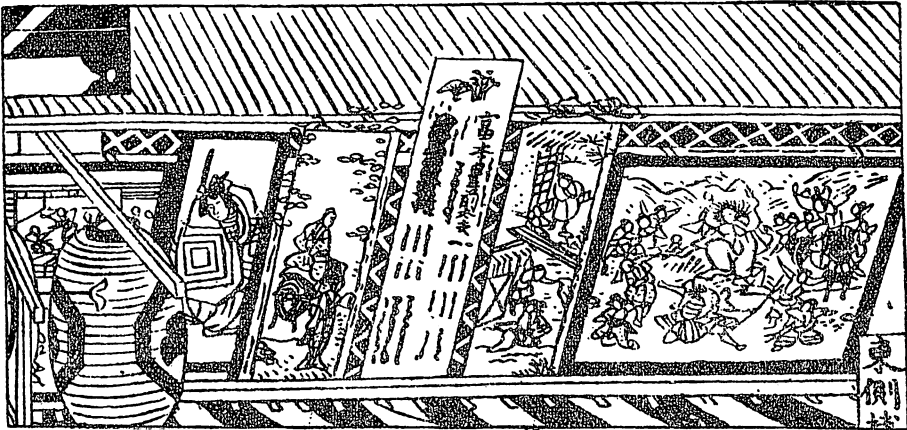
支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドングリ橋

戎橋 喜久屋北店

(心齋橋筋二丁目)





◇道 頓 堀 ・ 昭和九年一月號 ・ 第八十八輯 ◇

★ 繪 口 ★

回中座初春興行◆心中宵庚申◆廓治郎の半兵衛、福助のお千代、魁車のおかる市藏の平右衛門◆南總里見八犬傳◆廓治郎の犬山道節◆手打式舞臺面◆浪花座の新國劇◆三面記事◆島田の山内專務、辰巳の伴談二、長嶋の夫人◆大政小政道中記◆辰巳の小政、島田の小間物政、高木の大工政回◆十二月下旬の歌舞伎座◆五郎劇◆鏡後の花、結婚第一夜、五兵衛と六兵衛回◆松竹家庭劇◆峰の出来事、蛙のはらわた、日曜日、回歌舞伎座初春興行◆不如婦◆小堀の片岡中將、大矢の小島少將、梅島の武男、花柳の浪子◆葵の上◆喜多村のお茶、河合の勝次◆俠艶録◆花柳の力枝と重の井、梅島の瀬尾、喜章の三吉回◆文樂座人形淨瑠璃◆心中天網島、花くらべ四季壽、路娘、海女、良辨杉由來

★表 犬山道節古版齣

★扉 八犬傳原本挿繪

近世名優の頌讚劇……………白井松次郎 (二)

「毎週特作上映」の實現……………白井信太郎 (七)

戌に因める芝居……………森 ほんほ (八)

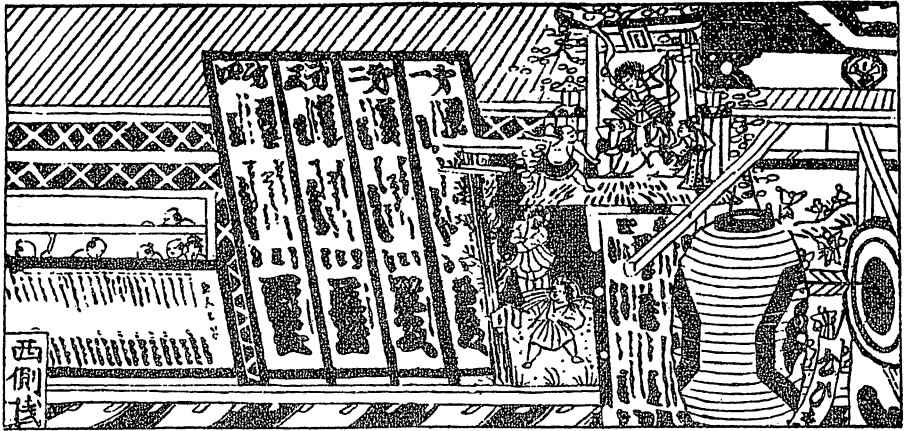
犬と芝居の話……………西尾福三郎 (三〇)

八犬傳一夕話……………倉田啓明 (三三)

八犬傳雜誌……………高谷 伸 (三六)

八犬傳讀流し……………高原慶三 (三八)

心中宵庚申に就て……………長野吉高 (三四)



春興狂言かるた……………小山紅露 (三)

漫景	芝居	初春
----	----	----

妹脊平三・酒井七馬…………… (三)  
 山崎喜一郎・大槻たもつ…………… (三)  
 富田英三・秋田收一…………… (三)

大 手 打 (脚本)……………大川澱江綴 (三七)

豪 華 版……………四海波 (三)

所謂國粹レヴューに就て……………羽仁六郎 (四)

◇ 戌歳の俳優名鑑…………… (八)

◇ 初春芝居中座總配役…………… (四)

◇ 初春芝居各座觀劇料…………… (一六)

★ 編輯後記……………田中滿彦 (四)

天下の銘酒

シラユキ

# 白雪

降るは白雪しんがね

黄金がねの酒は

その名来しい

銘酒白雪

摂津・伊丹・灘

小西酒造株式会社





心中宵庚申

中座初春興行

八百屋半兵衛

中村鷹治郎

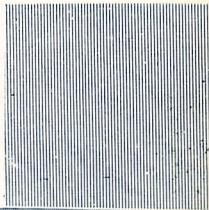
◇心中宵庚申◇



◇中座初春興行◇

助福村中・代千お房女 郎治鷹村中・衛兵半屋百八

車魁村中 つかお姉





アングロス井ス

ミルクチヨコレート

コーヒキヤラメル

チヨコレート

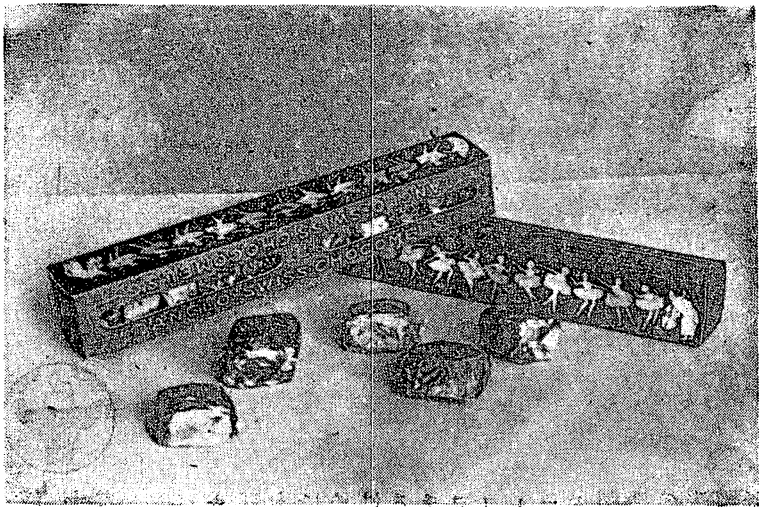
キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東 (94) 四二一  
六〇六  
四一六  
九三番





一九三四年  
飛躍する  
健康は  
チヨコレートの  
リズムに  
乗つて！

オンキョー

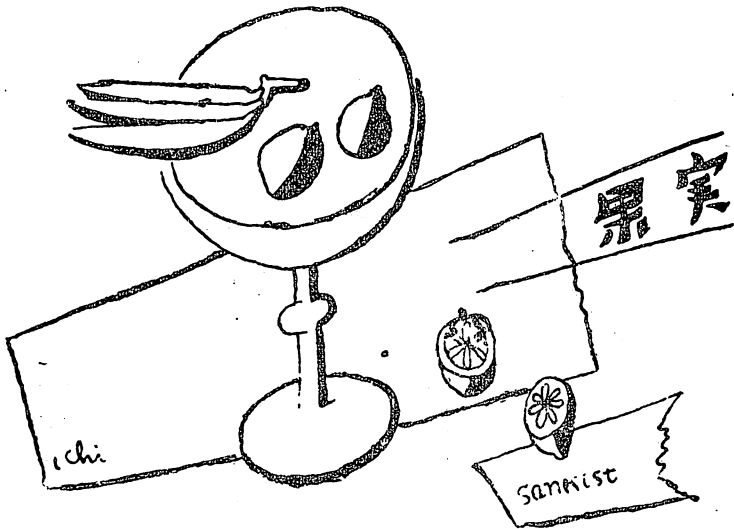


★ 者 驅 先 の 造 製 ト ー レ コ ヨ チ る け 於 に 本 日 ★

錢 十 錢 五

FRESH FRUIT

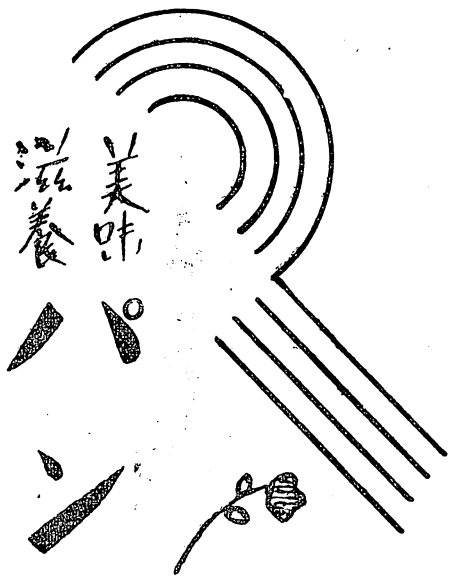
各國珍菓物問屋



大阪中央市場・天満配給所

岡部號山田米藏商店

電北 1 7 3 8



高級パン  
製造販賣

松岡貫一商店

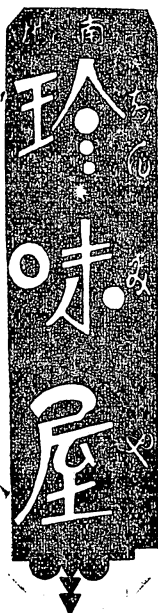
大阪市北區中崎町一一八番地  
電 北 七 四 七 九 番

珍らしき

お召し上り物

色數たく山

戎ばし筋演舞場前の

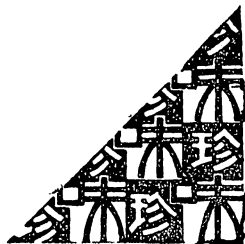
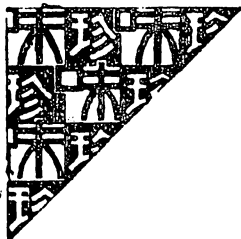


電話戎四六三七番

すべての事に

大競争

電話にて御注文の節は  
料金當店負擔



菓子問屋

# 小林壽美太商店

大阪市西區京町堀通一丁目

電話土佐堀

六八二〇  
六八二一  
六八二二

堀替穴阪二三一四番

歌舞伎座の

御觀劇には

是非高級貸眼鏡を

御利用願ひます

歌舞伎座

二階休憩室賣店

三階煙草店賣店

四階一幕席入口

にて承は

ります

大阪歌舞伎座

貸眼鏡部

證券金融



株式會社

日本信託銀行

本店

大阪市東區今橋二丁目

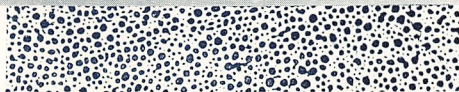
支店

東京市日本橋區南茅場町

有價證券買賣



◇ 行 興 春 初 座 中 ◇

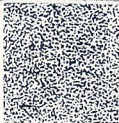


助 福 村 中 代 千 房 女

◇ 申 庚 宵 中 心 ◇



八百屋半兵衛……中  
 女房お千代……中  
 姉おかつ……中  
 平右衛門……市  
 村 鷹 治 郎  
 村 福 助  
 村 魁 車  
 市 川 市 藏



親 平右衛門……市川市藏



中座出演のため来阪した  
 坂東三津五郎

◇ 申 庚 宵 中 心 ◇

一 行 興 春 初 座 中 一



佛 國 巴 里

# カ ツ ピ ー

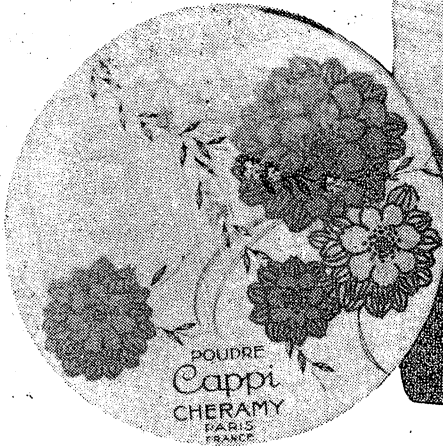
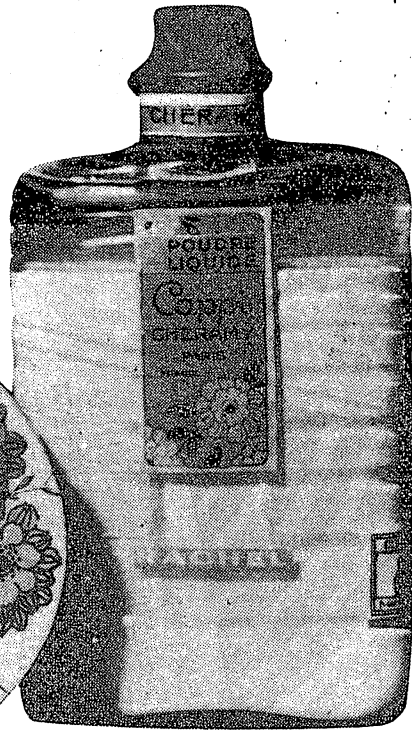
水 白 粉

(白・肌・オークル)

粉 白 粉

(白・肌・オークル  
時・眞珠色)

佛 國 巴 里 卡 ン ボ ン 街  
セ ラ ミ ー 化 粧 品 會 社



## CHERMAMY PARIS

毎朝八頁の大新聞 (一ヶ月書面)

# 日本工業新聞

工業家の機關、工業家の記録、工業家の  
知識、工業家の柱石、工業家の指針とし  
て業界より白熱的歓迎を受つゝある本紙  
を見よ!! 見本進呈!! 御申込は即刻を要す  
新聞界未曾有の三大附録

優良商品商標大鑑(五冊)昭和九年商工家  
日記(書面)新聞雑誌切抜保存帳(冊)以上  
を二ヶ月前金(三圓)申込者に無代進呈  
本社 大阪北區堂島濱通 東京京橋區西銀座

毎夕八頁 日曜十  
二頁の 大新聞 (一ヶ月  
六十錢)

# 夕大 大阪新聞

大阪神の出来ことは  
どの新聞より報導が早く

市内の購讀者は  
どの新聞よりも数が多い

大阪神の事情を知りたい人の  
必讀すべき新聞

大阪神に販路を求むる人の  
利用すべき新聞

本社 大阪北區堂島濱通  
支社 東京京橋區西銀座

謹 賀 新 年

社 長 古 川 浩



大阪市東區北濱一丁目三十番地  
電話 南局 五五二六六番  
五二六六番

明治十二年創刊

朝夕刊八頁

日曜日夕刊八頁發行



染織日出

月拾五回發行  
一ヶ月卅錢

本誌  
購讀料  
朝夕刊  
夕刊ノミ

一ヶ月

金七拾錢  
金四拾錢

謹賀新年



大阪が生んだ異彩ある夕刊新聞として堅實な歩みを續ける皆  
さまの大阪新日報は更新の活氣を全紙面に漲らせて一流の特  
色を發揮しつつ、一九三三年の天地に飛躍！

大阪で一番面白い  
特色のある新聞を

ぜひ御愛讀下さい！！

(價定)  
一部 二 錢  
一ヶ月 五十 錢  
郵税 十五 錢  
大阪府此花區上福島南一丁目  
發行所 大阪新日報社

電話福島 (45) 二六〇番  
二六一番  
二六二番



# 裂 小・具道小 裳 衣 貸

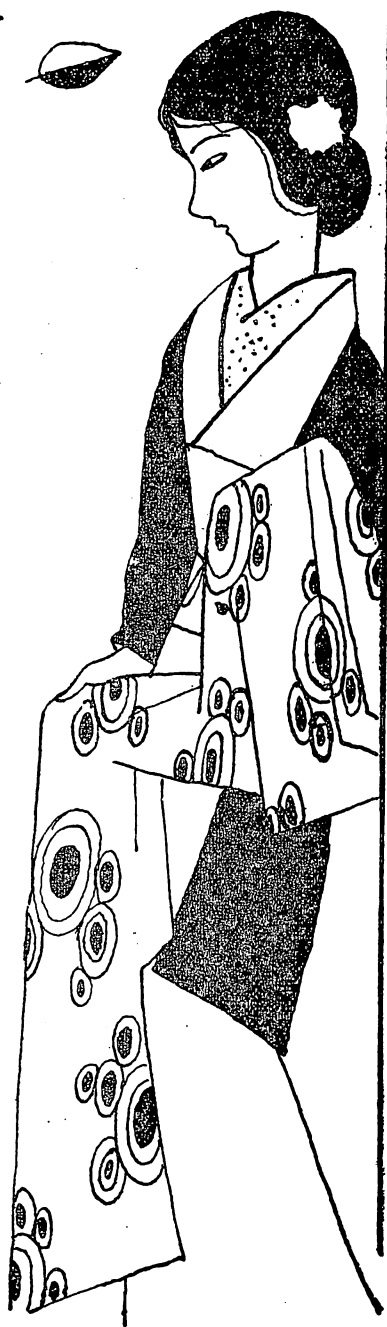
素人演藝會  
宴會の催物  
春秋温習會  
婚禮の衣裳

## 松竹衣裳部

本店  
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内  
電話 戎 五 六 三 四 番  
東京市淺草區駒形町二十三番地  
電話 淺草 六 六 六 一 番

「其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、御來客の御相談に應じ便利よくお取計らひ致します」

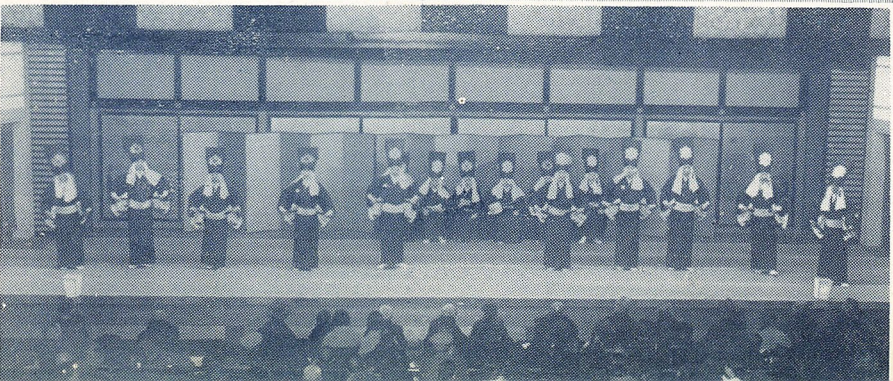


◇ 中座初春興行 ◇  
• 南總里見八大傳 •



犬山道節  
中村鷹治郎

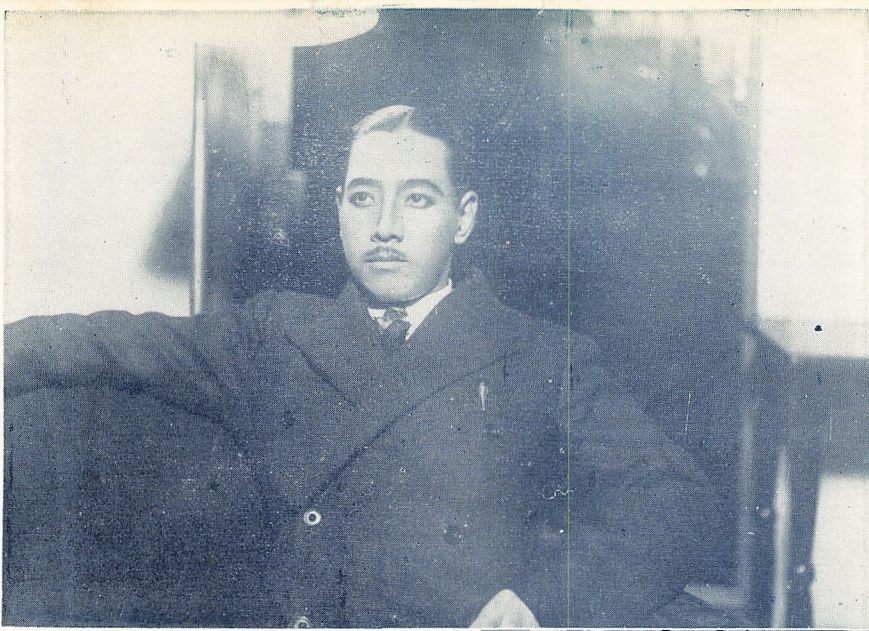
◇ 笹大せ手打 ◇



舞臺面

◆ 三面記事 ◆

山ノ内銀行専務 島田正吾



編輯長 伴讓二 辰巳柳太郎  
夫人 禮子 長島丸子



大詰 編輯室の場



伴夫人 禮子 長島丸子 専務 山内武内 島田正男

◆ 初春の花座 ◆ 新國劇 ◆





# 謹賀新年

快 俠  
河内山宗俊 三役主演  
阪東妻三郎

春告鳥  
森月江入  
静田  
一郎  
子かた

右門捕物帖  
嵐 寛壽郎  
三十八番手柄

春の目ざめ  
中高桂  
野田  
英珠  
治稔子

神風連  
入月中小  
江形野杉  
かた龍英  
子助治勇

新春封切輝ける新興映畫陣

新興キネマ株式会社大阪支店

謹  
賀  
新  
年



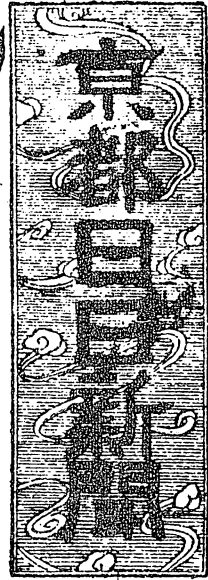
頁六十共刊夕紙本

大阪市北區堂島上二丁目三十六番地

發行所  
株式會社  
大阪每日新聞社

電話代表番號北五五〇〇・五六〇〇

振替貯金口座大阪四五〇



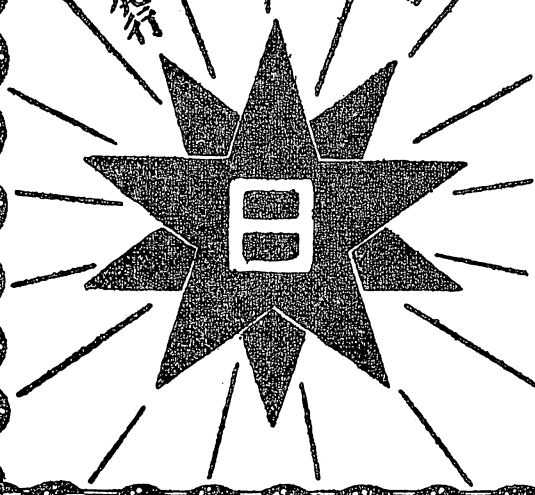
事實が證明せる

この奇蹟的大飛躍を見よ!

大京都の代表新聞

東京の諸君の注意

毎朝の回覧



京都市烏丸通丸太町

京都日日新聞社

電話上局 (※三六・三七・三八・三九・四〇番)  
長四八・四九・五〇番  
振替貯金口座大阪二九〇二三番

大 阪 市 中 島  
(通 電 稱 署)



# 大 阪 電 報 通 信 社

(本 社 東 京 丸 内)

電 話 本 局 (必) 五 五 九 九 一 一 六 五  
 五 九 九 四 三 二 一 八 四  
 六 〇 三 八 〇 三 〇 〇 〇  
 六 〇 四 三 〇 〇 〇 〇  
 三 九 二 〇 〇 〇 〇  
 三 九 二 〇 〇 〇 〇  
 五 六 〇 〇 〇 〇  
 印 刷 局 用  
 二 〇 〇 三

# 電

八百哩の専用電話  
 東京—名古屋—京都—大阪—神戸—  
 岡山—廣島—下關—福岡(同時送受)  
 八百哩の電送専用  
 東京—名古屋—京都—大阪—岡山—  
 廣島—福岡(同時送受)  
 電通内外事務所  
 東京 名古屋 京都 神戸 松山 岡山  
 廣島 下關 福岡 長崎 熊本 大分  
 鹿兒島 金澤 長野 仙臺 青森 函館  
 盛岡 釜山 京城 大連 奉天 新京  
 北平 哈爾濱 上海 南京 天津 漢口  
 青島 濟南 倫敦 桑港 紐青 宿務

# 通

遠 信 部  
 ニエス供給、内外經濟通信  
 時事寫眞通信、出張撮影  
 廣 告 部  
 内外新聞、雜誌廣告代理取扱、  
 圖案文案意匠  
 製 版 印 刷 部  
 寫眞製版、紙型、鉛版、  
 活字鑄造、各種印刷、出版



謹  
ん  
で

新春の賀詞申述べます

皇紀二五九四年元旦

新  
國  
劇  
同一

(初春の浪花座出演)

賀  
正  
日  
刊

◆不屈權勢・不娼富貴  
◆議論公明・報道迅速

◆夕刊四頁發行

# 大阪新聞

發行所

大阪市天王寺上之宮町一番地

大阪新聞社  
電話南一三一〇番



# スキナ紙

姉妹品

スキナ石 鹼  
スキナ紙白粉

清新な感觸!!

御愛用を乞ふ

本 鋪

中 田 ス キ ナ 屋

大 阪

發 賣 元

朝 日 堂 株 式 會 社

大 阪 市 東 區 南 久 寶 寺 四 町

◇ 新國劇 ◇ 初春の浪花座 ◇

◇ 大政小政道中記 ◇

小間物政 島田正吾  
大工政 高木繁



大政小 政政 辰秋 巳月 柳正 太郎 大政

◇ 座伎舞歌の旬下月二十 ◇

—劇郎五家廻我曾—



『鷹の目 鳶の目』



『花の後銃』

お 秀……秀 調  
 父 ……五 樂  
 櫻井治介……蝶 六  
 妻一子……五 郎  
 息伊三郎……二三蝶

『五兵と六兵衛』



『結婚 第一夜』

前川健一……  
 ……五 郎  
 お 梶……  
 ……大 磯  
 花 嫁……  
 ……桃 蝶





# 富士紅茶

純国産を誇る

優秀セイロン種

大阪市東区北久宝寺町二

大光賣元

富士屋商店

光りは東方より  
非常時新聞  
躍動！

錦城 米田誠夫經營

大正日新

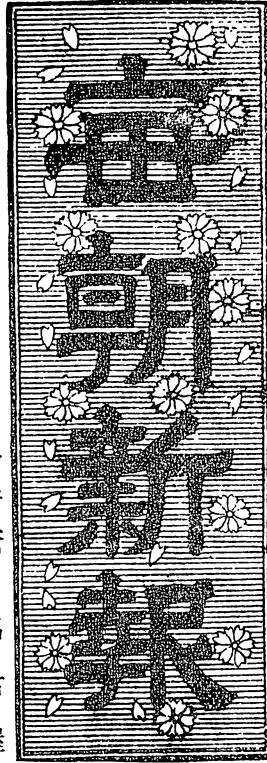


「筆陣堂々天下無敵」  
「正戦勇闘易日本」

目丁二町兜區橋本市京東  
社支京東  
番七七五三 町塩茅話電  
番五〇〇三

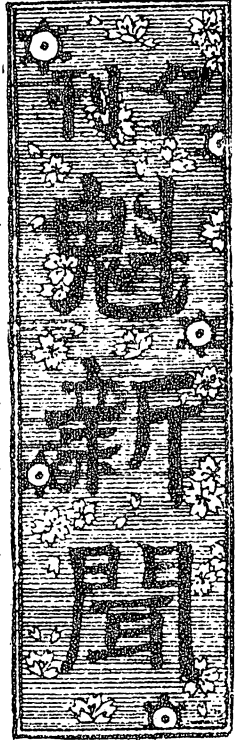
地番六目丁四濱北區東市阪大  
社聞新日日正大  
番〇六九 番〇七二  
番八二八四 番〇六三四 局本話電

東京市  
大阪市  
名古屋市  
三都聯携

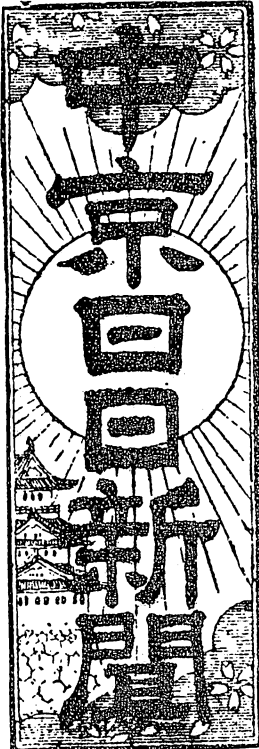


發行所 名古屋市

發行所 東京市



三社無休  
日刊



每朝新報社 株式會社

大阪此花區上福北一ノ七  
電話代表 土佐堀辰一五九一・卷二五九五

土佐堀三九〇番

振替口座大阪〇六二〇番 私人書函野田局二十二號

# 大阪毎日新聞

本誌が獨り夕刊新聞として覇を爲すに止まらず全日本の新聞界に於ても鬱然として一大王國の觀があるのは單に面白いからのみではない、讀めば必らず胸奥を震撼させずには居ない感激と正義の文字で紙面が盛上つて居るからである。人情風俗の活映畫。財界の波、商機の動きには正確な羅針盤、讀みたい新聞、讀まねばならぬ新聞、讀まずには居られぬ新聞。……………

新部一  
開部一  
代錢貳  
錢十五  
錢五十  
稅郵

廣告  
料行一  
圓壹行一  
圓貳行一  
關通普  
欄別特

發行所  
大阪東區北濱  
四丁目七番地  
大阪日日新聞社

電話本局  
1101・1102・1103  
1104・1800・2600  
70・71  
夜間受付發送用  
1101

迅速叮嚀

凸銅

版版

吉谷寫真製版所

東成區大今里町七五九  
電話南一四三六番



◇ 十二月下旬の中座 ◇  
◇ 初春の「南座」 ◇

源 太 十 吾  
お ぐ に 東 愛 子  
榮 吉 天 外  
京 助 小 織 桂 一 郎

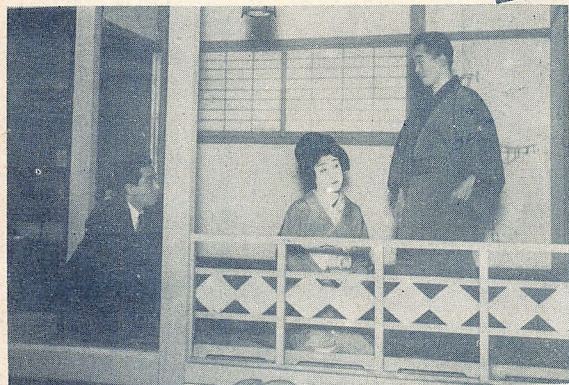


『事來出の嶺』

亙 田 高 …… 人 文 井 荒  
子 枝 千 花 浪 …… 子 花 妻  
豊 安 元 …… 助 之 敬 木 鈴  
羽 音 野 春 …… 子 り 妻



『日 曜 日』

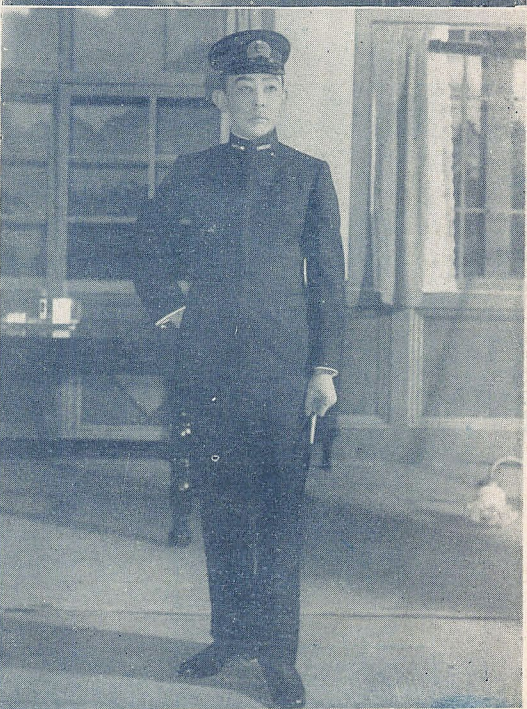


『たわらはの蛙』

外 天 員 店 ・ 吾 十 彦 邦 田 岸  
薰 河 石 香 代 千 妓 藝



◇ 劇 庭 家 竹 松 ◇



片川 岡島 中武 將男 小梅 堀島 誠昇 小浪 島浪 少子 將子 大花 矢柳 矢花 市章 次郎 郎

◆ 歸 如 不 釋 新 ◆

◆ 劇派新大京東 ◆ 座伎舞歌の 日初日十月一 ◆



大阪府八尾

# 大阪競馬

十一月二十九日  
 二十五日  
 月 日 日 日  
 (延順天雨)

障碍と特種ハンデ競走アリ

單・複式併用

八頭以上三着迄



夕刊六頁  
購読料五十美

もても明るい  
そして面白い

だから  
どの家庭でも引張り屋

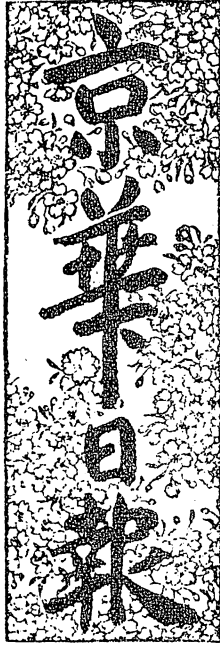
大阪第一  
夕刊紙



本社 大阪市西區京町橋  
東京支局 麹町區有樂町二丁目



謹  
賀  
新  
年



京都市富小路三條北福永町

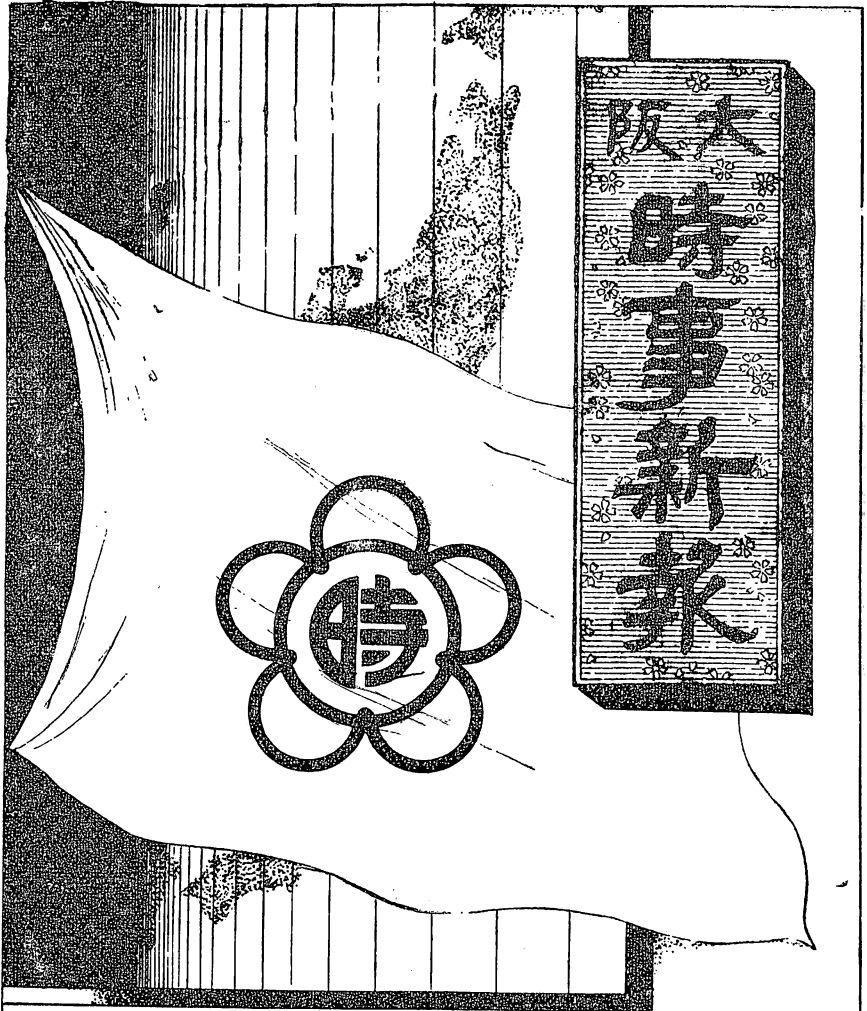
電話  
本局 五六〇〇・五六〇二 (編輯用)  
五六〇一 (營業販賣用)

謹賀新年

舊年中は格別の御愛顧を蒙り有難本年も尙一層御引立を賜り度希上候

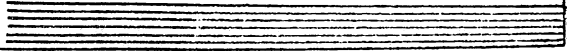
新聞廣告業 株式會社 京華社

本店 京都市三條通烏丸東入  
電話本局②代表二二一一番  
支店 東京・大阪・神戸

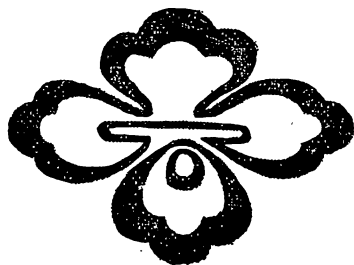


！ 進 躍

報 新 事 時 阪 大



謹 賀 新 年



吉 本 興 業 合 名 會 社

大阪市南區東清水町三〇

電南九五・四七八八

移 動 演 藝 部

◆ 葵 の 上 ◆

藝者お榮…喜多村綠郎  
 藝者勝次…河合武雄



◆ 十日初日の歌舞伎座 ◆

— 東京大新派劇 —

郎太章柳花 枝力東坂  
 昇 島 梅 男士富尾瀬



(劇 中 劇)

重の井…花柳章太郎  
 三吉…花柳喜章

◆ 俠 艶 録 ◆





〳心中天網島〴〵

紙屋内のだん

紙屋治兵衛桐竹政龜

女房おさん〴〵

〴〵吉田文五郎



〳花くらべ四季壽〴〵



〳海女〴〵

海女〴〵吉田文五郎



〳鶯娘〴〵

鶯娘 桐竹紋十郎



南都二月堂  
〳良辨杉由來〴〵

良辨上人

吉田榮三

渚の方

吉田文五郎



謹賀新年

初春 興行 新派劇

角座出演

梅	五	宮	廣	富	丘	白	明	若	瀧	汐	笈	都	畑	進	市	芳	六	島	吉	玉	山
野	井	月	村	瀨	士	川	智	葉	八	蓮	川	見	武	築	藤	川	賀	條	田	口	川
秀	信	松	澄	滿	ん	京	百	蘭						文	英	勝	敏	之	三	正	俊
男	子	江	子	惠	子	子	子	子	子	洋	夫	男	穰	郎	郎	兼	助	郎	雄	昇	雄

謹  
賀  
新  
年

各種印刷  
定期刊行物

加  
藤  
印  
刷  
所

大阪市東成區鶴橋北之町一丁目一五四番地

電話天王寺二二四七番

創刊明治十五年

刊日



完備せる本社調査部編纂の  
非常時日本財界指針

和九年度版

「經濟年鑑」

三四四定價  
壹百六圓  
頁版

講讀料

一月一錢五

大阪經濟新聞社

株式會社

東區北濱一丁目

謹  
賀  
新  
年



大  
阪  
北  
濱

# クゼラ白粉

麗朗ノ一ヴルな白色  
新鮮モターンな肌色



この氣品…  
この魅力…



# 御園

# つぼみ白粉

白肌色  
黄色肌色

四〇セン

目下新証實披露のため御買上毎に洩れなく御園フェースペーパー冊  
進呈更に壹萬名様へ抽籤にて壹等金指輪より七等迄の景品付買出し中

近代美を欲する方……………は  
個性美を生かしたい方……………は  
お使ひにならねばならぬ白粉です  
ツキ・ノビ良くお化粧崩れのせぬ  
お召物を汚さぬ真に理想的な  
優秀品です……………是非お試しを！

悉くの女性に

捧ぐ！

遂に發明された

今日からの白粉



伊東胡蝶園

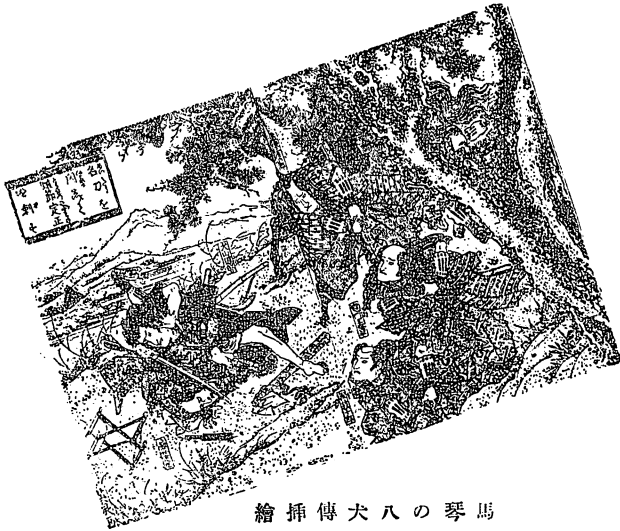
藝雅・究新劇演・刊月

一月號

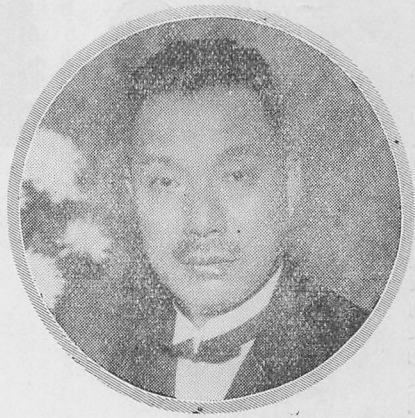
# 通類編

第九年

第八十八輯



馬琴の八犬傳挿繪



# 明朗日本新春の辭

## 近世名優の頌讚劇

あしべ踊の劇場進出  
昭和九年の劇壇政策

松竹興行株式會社

會長 白井松次郎

皇太子殿下御降誕の御慶事に九千萬國民歡喜の絶頂に達した思ひ出多い年も、お目出度いまゝに送りまして、  
明朗そのものゝ様な昭和九年の新春を迎へましたことは、まことに感激に堪えない次第でございます。こんな  
お目出度い新春は私の生涯を通じて、千載一遇の事だらうと思はれます、さうです、千載一遇だと思ふと、  
私は今年こそは、この國民的感激を意義ある仕事に傾注して、演劇界のため渾身の努力を致したいと存  
じます。

省みますれば、この二三年來の日本は、全く内外多端の非常時に直面して、一日として晴れやらぬ雲の掩ふ  
様な状態でございましたが、何だか本年は元旦匆々から急にバツと夜の明けた様な感じが致します。非常時  
日本の夜明け、そして次に來るものは、明朗日本の朝です。

× ×





私は今年こそ一番、何事にも意義ある計畫を表現して、江湖大衆に報りたいと思ひます。その一二の腹案を申しあげませう。第一に大阪が生んだ、近世の歌舞伎名優の頌讃劇であります。陽春の候を期していづれ歌舞伎座の様な大劇場に諸君期待の東京俳優と當地大歌舞伎の錚々たる合同組織に依る大顔觸れを以て、大々的の記念興行を開催することです。昨年三月開演しました、團十郎追遠興行にも匹敵する催しで、しかも當地出身の近世名優中、殊に現在活躍されてゐる諸俳優に最も縁故深い故人を追慕頌讃する腹案であります。腹案でありますから、まだその具體的な發表にまでは立至つて居りません。

また、これも只今計畫してありますが、四月の歌舞伎座は吉例と致しまして「春の踊りを開演」することにして居ますが、今年には南地五花街の取締阪口祐三郎氏と提携致しまして、歴史ある『あしべ踊』を従来の演舞場式演出の面目を一新し、考案意匠構成共に第一流の作者に依頼して上演する事でありました。只今腹案を練りつゝありますが、従來の「春の踊」に見ざる日本固有藝術の發揮に全力を注ぎたいと存じて居ります。

尚、日本固有の藝術と云へば、本年劈頭の道頓堀中座に開演致しました中村鴈治郎一座の大歌舞伎は、新時代に逆行して先づその劇場装飾を古典に還元し、出しものも「里見八犬傳」「鏡山舊錦繪」「心中宵庚申」を始め大手笹瀬の手打式など、すつかり昔に戻つた氣持で古式尊重で開場致しました。これも三百年の傳統を持つ歌舞伎の爲めに何らか貢獻する所あれば私の本懐これに過ぐるものはいません。



## 中村鴈治郎論

高安吸江

江戸の荒事、上方の和事、その何れにしても、彼是とへちむつかしい議論なんかすると、本来のうま味が何處へやらけし飛んでしまふやうな氣がするもので、恰度三ツ四ツになつた兒がまた吸てゐるお母さんの乳汁の味を、榮養學的考察から論すべきでないのと似てゐます。

慈愛に満ちた母の顔、美しい肌、柔かい乳房から滾々と湧き出る生温いそして淡々しい甘味、眞珠のやうな色艶をもつあの乳汁、我等はそれ等一切をひつくるめて渾然たる一つの雰圍氣を感得すればよいので、今更なまなかの議論などによつて、折角完成されたと見ゆる映像をうち壞はすに忍びないではありませんか。

同じやうなことが今日の鴈治郎丈に向つても云へます。此人の天下一品である和らかな味や艶やかさはもとより情熱と云ひ氣力といひ、そこに議論の餘地があると誰が云ひ得るでしやう。早い話が此間の忠臣蔵にしても、東西諸名優が苦心の藝にいづれ劣りはないが、山崎で成駒家が始めて顔を出した時、あの廣い歌舞伎座に満員の見物が皆思はずアツと歡呼をあげ、誰の顔にも今迄満たされなかつた或ものに接し得た寛樂の氣持を認めることが出來た、此偉大なる魅力について

今更何を云ふのでしやうか。まあこう云てしまへばあまり簡單に片付き過ぎますから何か少々蛇足を加へることにします。此春狂言に出ると噂のあつた藤十郎の戀は染川十郎兵衛の賢外集にある話を材料にしたものですが、初演時には二回も引つゞいて興行した程の人氣で、其後鷹治郎丈の當藝の一つと認められ、其上丈は此元祿期の名人坂田藤十郎に匹敵すべきものと稱せられるに至りました。

此比較は多少尤もな點もあります。第一藤十郎は世話物に巧で、やつし、濡れ事、くぜつ、殊に傾城買の名人と云はれすなほで大盡の風流をなはるとありますから大様で上品だったのでしやう。鷹治郎丈が伊左衛門にはまるやうに、藤十郎は伊左衛門を十八度も演つてをります。

彼は嵐三左衛門の空想的なのに反して、「何役をつとめ候とも正眞をうつす心がけより外他なし」といふ寫實主義で譽められやうと思ふなら、見物を忘れ、狂言は眞のやうに満足に致したるがよいと、何處までも藝本位で研究心がつよく萬事に細心の注意を拂つてをりますが、此點みな成駒家と共通する處が多いのです。

藤十郎の戀の一件は、密夫の仕内を體驗せんために祇園町のある料理茶屋の女將に戀をしかけて、女かあはやなびかんとした時、即座に逃げ歸つたといふのですが、元來彼は若年以來料理屋へ出入せず、やつと五十歳以後になつてから已むを得ず四五軒へ一度づゝ行つたゞけです。それは太鼓を持つ氣分、所謂藝人氣質では藝が進まぬと信じてゐたからで、かうした性行の彼にして始めて此事件の堅實さが裏書せられるのであります。一面また彼の冷靜な點をも見逃がすことが出来ません。

此等の點では鷹治郎丈と藤十郎とは寧相反してゐるとも云ふべきで、丈の性質として到底そう偏執に、冷酷にあり得ま

せん。いや反對にもあまり融通がきつ、また遙に情熱的であります。それで此狂言に丈が藤十郎の理智的な藝術慾を完全に描寫し得たとは私に信ぜられないのであります。

こゝに私は情熱的と申しましたが、丈は元來女子に對する純情を其まゝ見せるのを罪惡のやうに心得、いつも丈一家の道徳觀(?)によつて正義づけやうとする風がありますので、心の奥底にもつ燃えるやうな情熱も歪められた形でのみ發表されるために、よく他から誤解され易いのです。

此間京の顔見世で大好評を博したあの河庄でも、家庭の犠牲に身を苦界に沈めた小春が、その第一夜に事務的で敏腕なおさんを妻とする紙治に會つて、恰度初婚同様の關係からあつした深みへ落込んだものとの解釋で熱演するのですから、丈はいつも半二の紙治になり近松の天網島にはなり得ない嫌があります。

母や子に對しては女の様子に遠慮は入らぬだけいつも成功で、盛綱で母微妙にあまえ、甥小四郎を憐れむ情味は實に麗らしく、先達の山科の内藏助、顔見世の問題になつた布引の實盛などそれ〴〵獨得の美點を見せてをります。

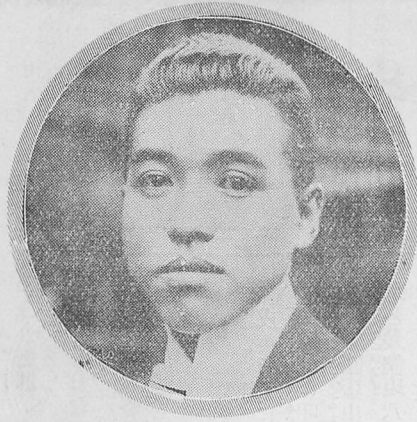
つまり鷹治郎支は藤十郎系の和事師ではあるがそれよりも更に情熱的で、それが由良之助や盛綱などの役々にも及んで成功してゐる點から見て、私共は丈を藤十郎よりも寧ろ上位に置くべきであるときへ考へるのです。

元祿期の名優山下京右衛門の説では、藤十郎は天性の名人で、誰も彼に及ぶものがあるとは思はれぬが、生れながらの名人は子弟を訓練する経験がないから師匠にはなれぬのです。鷹治郎丈は天性も無論あるが、それを完成させたのは一にも二も努力によつたのですから、健康條件が許す限り後進の指導薫陶につとめ、上述の方面で種々模範的な作品を示されんことを私はいつもながら切望する次第であります。(丁)

◇ 興新の年四三 ◇

# 「映上作特週毎」

## 現 實 想 理 の



昭和九年の新興キネマは、昨年の現代劇にみる特作集中傾向の打壞、時代劇の強化、トーキー着手によつて本年こそ「第一線を目指して」の標榜を全面的に作興しなければならぬ。

昨年度の作品中、私の印象に残つたものは、新興の「瀧の白糸」と松竹の「沈丁花」がある。「瀧の白糸」は新興映畫の製作水準と市場價値をより高きボインにまで導いてくれたこと、「沈丁花」は、タイアップ宣傳に於て企劃の雄大であつた事と隻方の宣傳効果が徹底されたこと、前者は藝術的に後者は宣傳戦に於て、邦畫界に新しいスタンダードをしめしてくれたからである。

私は最初に現代劇の特作集中傾向の打壞と云つたが、それは新興本年のヒット物「瀧の白糸」「新しき天」「青春街」が、特作本位によるスタヂオの精力集中だと考へられてゐる。

しかし實際は何れも新興映畫の水準向上のため製作された市場デモであり、見本に通ぎないのである。それが無意識の裡に撮影所内をして或は營業者側をして、遂に上映館にまで特作映畫のタイムリイ、ヒットを製作方針だと解されて仕舞つた、これは私の是とするところではない。

私が新興に直接關係した當初に聲明した如く「毎週特作上映」と理想的目標として製作機構を改革しつゝ、昭和九年を迎へたのである。

その完成への試作として發表した「瀧の白糸」「新しき天」「青春街」が幸皆様の御期待にそひ絶大なる御聲援を得たる事によつて私の理想實現に自信を得たのである。

故に毎月特作上映の標準の「瀧の白糸」級において續々大作を發表する事を新興フナ諸氏に約束すると同時に撮影所内の諸氏も誤れる特作本位の感念を一掃されて一層の自重と活躍を切望して年頭所感にかへる。

新興キネマ撮影所長 白井信太郎



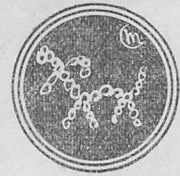
十五代目  
橋 屋

市村羽左衛門

▼本名、市村録太郎

明治七年十一月五日生

▼略歴、東京本郷湯島天神町に生る、父は十四世阪東家橋、明治十四年新富座にて竹松と名乗り初舞臺、三十六年十月歌舞伎座座にて十五代目市村羽左衛門を襲ふ、當り役は辨天小僧、石切の梶原、源氏店の與三郎等



八 犬 傳

成に因める芝居

森 ほ の ほ

成年で犬に因んだ芝居といふと先づ「八犬傳」が大物せう。原作からしてお芝居がかつてゐるのて天保から明治にわたつて、いろいろ脚色されてます。私どもが見たものでは、犬山道節と犬村莊助との、圓塚山の出會ひ、道節の刀賣り、荒芽山の力次尺八の亡靈の出現、芳海閣の大屋根で犬坂毛野と犬飼現八との立廻り等の條で、市村座で演つた時の吉右衛門の道節と力次(?)の亡靈の好かつたことを覚えてゐます。先輩の話に據ると、九代目團十郎の墓六は素晴らしく面白いものだったさうです。これは元來端敵のやうな三枚目のやうな役で、これまで餘り上の役者は演らなかつたのを團十郎が買つて出ただけに、見物を煙に巻いたが評判になつたのでせう。

天狗高時と千匹犬

團十郎の「天狗高時」では、愛犬の雲龍が浪人安達三郎の母親を噛むので、三郎が斬り捨てる、それが爲捕縛される條が幕明にあります。これは大近松の「相模入道千匹犬」の脇屋義助が高時の愛犬を一刀兩断にする條に倣つたのではないでせうか。この淨瑠璃には牢につないだ義助を引出して、澤山の犬に噛み殺させようとする凄慘な場面があります。人間と犬とが血みどろになつて争ふので、とゞ白石といふ犬が義助に力を添え、危い處を逃れるといふ仕組ですが、これを芝居にするのは一寸難しいでせう。



初代 播磨屋

中村 吉右衛門

▼本名、波野辰次郎

明治十九年三月二十四日生

略歴、東京浅草象潟町に生る、父は中村歌六、明治三十三年市村座にて中村吉右衛門と名乗り初舞臺、當り役は近八の盛綱、嫩軍記の熊谷、桃山譚の清正等



四代目 豊田屋

阪東壽三郎

▼本名、阪東與三郎

明治十九年十二月十日生

略歴、大阪島の内に生る、父は三世阪東壽三郎、明治二十四年春阪東長次郎と名乗り角座に初舞臺、大正元年十一月浪花座にて阪東壽三郎を襲名す、當り役は、伊賀越の重兵衛堀川御所の

### 忠彌の濠端

「堀端のよき」に上戸は釣りこまれ「左團次を真似てぶふ六ぐでん也」の川柳通り、丸橋忠彌の芝居は幕明から朗らかなものだが、更にこの芝居に愛嬌を添えてゐるのは例の縫ひぐるみのワン公です。

先代當時以來この犬にはかなり苦心談があるやうで、啼き聲を研究する爲に丸の内の日比谷の原（今のやうに偉大なビルディング街の無い時代）で、盛んに練習を續けてゐると本物の、ワン公に取圍まれ、命からがら逃げ歸つた等といふ話があります。現在では左團次門下の左喜松がこの犬を演つてるやうです。この若い役者は物真似が上手で、ラヂオ放送もしましたが、この優も「堀端」の犬では苦心談があるやうです。

### おとせ十三郎

默阿彌物の「三人吉三」の中に因果物師傳吉の娘のおとせと、以前捨てた十三郎とがお互に知らずに戀に落ちる。つまり畜生道の契を結ぶのだが、それを作者は傳吉が孕み犬を斬つた報たとしてゐます。そして、同じく傳吉の悴の和尚吉三が兄弟の誓約をしたお坊吉三、お嬢吉三の身替り首におとせ十三郎の二人を殺害する。その時に血潮が犬の玫のやうになり、二人は犬のやうな姿で這ひ廻るといふ趣向になつてゐます。同じく犬の因んだ芝居にしても、これは餘り氣持の宜しくないものです。

この外、登場人物には「敷皮會我」の犬坊丸、白縫物語の犬千代、「木下陸狭間合戦」の左枝犬清、「前田犬千代」等があり、犬を斬る狂言では「村井長庵」「天一坊」があり、犬の悪靈を驅使する犬神使を題材にした古劇「犬神」もあり、主人（醫師道易）を殺した下男（小助）の證據物件を咬へ出す犬の狂言（實録先代萩）もあります。まづさし當りこの位の處でせう。

辨慶、その他新劇方面に異常な才能を持つてゐる



六代目  
音羽屋

坂東彦三郎

▼本名、阪東英造

明治十九年十月十二日生  
略歴、東京日本橋濱町に生る、父は名優五代目菊五郎、明治二十九年尾上英造と名乗り明治座に初舞舞大正四年四月坊東宗家の養子となり中村座にて六世坂東彦三郎を襲名す、當り役は助六の意休、近八の和田兵衛等



五代目  
明石屋

大谷 友右衛門

▼本名、青木八重太郎

明治十九年六月一日生

略歴、東京淺草猿蓑町に生



# 犬と芝居の話

西尾福三郎

サル・トリ・イヌ・と干支の語韻に表れた所を芝居關係者流に擔いで考へてくると今年の景氣は何うだらう。一昨年はサルで見物は去つて入りが悪かつたか、昨年はトリこんで大いに儲かつたか又今年は見物が去ぬで損の卦か。強ちさうと許りも限らないだらう。これを當世流に云つてワンサくと見物が押かけてきて繁昌疑ひ無しとみたら何うだらう。

さて犬に困んだ芝居を吉例とあつて考へてみるやうにとの嚴命である。

先づ日本演劇史の抑々として有名な天鋳女命に次ぐ彦火々出見尊の御兄火酢芹命、この方が日本人として自ら俳優と稱した者の最初である。御弟彦火々出見尊と争つた火酢芹命は終に負けた。——この争ひの一端を芝居にしたのが山本有三氏の海彦山彦である——そこで火酢芹命は堂と面に赭を塗り身振を以つて永く汝の俳優人とならうと誓つた。その上我子孫八十連屬は汝の俳優人となり狗人となるであらうと附け加へた。よつて、この人の子孫が尊の宮牆の傍を離れず吠狗に代つて永く奥津城の守りとなつた。



父は中村鷲助、明治二十六年甞兵衛と名乗る浅座に初舞臺、降つて大正九年四月市村座に五代目友右衛門を襲名、當り役は打入の五郎、寺子代の支番、矢口の頓兵衛等



三代目  
高島屋

市川松 葛

▼本名、鈴木鐵彌  
明治十九年九月二十三日生  
略歴、東京新宿の娼家新萬樓に生る、明治二十九年先代左團次の門に入り左喜松と名乗り明治座に初舞臺同四十五年明治座にて三世市川松葛を襲ふ、君は常に左團次の女房役として新作ものに成功多してゐる



六代目  
升田屋

その型代を大和の犬石と稱して今も海上郡佐保村の山陵にあつて、四隅に獸面人身の像が線刻されてゐる。日本書記神代史の記する所に微つて考へると、この犬石が日本俳優の濫觴ではないかと思はれる。よつて此か堅苦しいが、犬と芝居の話の序として持出した所以である。

次は、本年中座の新春興行に古典復活の序開きとして華々しく表れるとか噂にきく八犬傳の芝居である。

今でこそ大菩薩峠と云ふ途方もない大長篇小説が出現して、讀物界の王座を占めてしまつたが、その昔、と云つても茲二十年前迄は、興味本位の長篇讀物としては、太閤記か八犬傳かに限られてゐたものだつた。支那の三國志、水滸傳に亞いで我朝では眞つ先東京の某座で五月晴隅田高樓の外題で義賢館?の場が當之助と云ふた今の吉三郎や千代之助その他一座で出たのが私としては記憶の最後である。語り物としては往々耳にする期會がある。だんまりや芳流園の場は田舎芝居でよく出る事があるやうだ。こんな芝居に理屈は禁物、ただ珍らしいと



中央の黒松を圍んだ石の垣の間に并折られる傳奇小説の親玉である。登場人物が悉く犬に縁があると云ふ意味で、これ程成年に因んだ芝居は又とあるまい。ヒロイン伏姫の名が八人の騎士、いや犬士が皆犬の一字を姓としてゐる。犬は三日飼へばその恩を忘れずと云ふので、八犬傳の中心思想たる忠孝仁義の大道をこれによつて表徴した作者馬琴翁の意圖なのであらう。近來頓と舞臺に現れないが、十數年以前

### 市川壽美藏

▼本名、太田照造

明治十九年七月十六日生

▼略歴、東京彌敷町に生る、

明治二十七年二月高丸と名

乗り明治座に初舞臺、三十

八年先代市川壽美藏の養子

となり登升と改名降つて四

十年三月明治座にて六代目

壽美藏を襲名す、當り役は

修禪寺のかつら、布引の實

盛、鈴ヶ森の權八等



四代目  
瀧野屋

### 市川男 女藏

▼本名、荒川清

明治卅一年八月廿六日生

▼略歴、東京濱町に生る、父

は市川門之助、五歳の時男

寅と名乗り歌舞伎座に初舞

臺、大正六年四月市村座に

て四世男女藏を襲ふ、若手

隨一の花形役者としてその

將來を囑望されてゐる。

云ふ事だけで我らにはこの上ない珍重神味である。芝居の最も原始的な表現形式としてのだんまり世界に於ける最も優れたパントマイムとしてのだんまり、色と言と動きの三位一體的な表現美のだんまり、このだんまりと云ふ妙な一語の中に、意圖された内容の完全な説明のあの面白さ等、この期會に充分今日の見物に徹底させてやりたいものだ。

次に大の出でくる芝居となつて中々面倒だ。

第一にお馴染の濠端の忠彌、犬に碎とみせかけて江戸城濠の深さ幾尺を測る所、これは犬が重大な役目を務めてゐる。

又、高時天狗舞では執權の愛犬を斬り捨てた許りに命を取られやうと云ふ騒動が初まる。これ亦犬が相當な役をしてゐる。

犬と人間の命を天秤にかけて點では例の犬公方の芝居がある。忠臣藏等もこれに亞ぐ時代の出来事だから、或意味で犬時代に對して人間時代を聲明しやうとしたファツシズムの表れと見れば見られぬ事もない。

犬の血を人間の血と詐つて見ん事天下對手の大賄突に破れた大岡政談の天一坊の芝居、これにも犬が一役買つてゐるが文字通り犬血キであつた。

その他委して考へたら芝居に出てくる犬はそれこそ伊勢屋稻荷に犬の糞程澤山あるだらう。

忠義の代名詞である犬が、一方では間牒の事をいぬ等と稱し又犬侍等とも云つて不忠義の代名詞にもなつてゐるのは何うした事だらう。この種の不忠實ないぬなら大ていの芝居の中へはざらに出てくる。差しづめ忠臣藏七段目の斧九太夫等この種の代表的いぬである。いやいぬでなかつた彼は獅子心中の虫だつた。



高砂家

中村政治郎

▼本名、笹木徳太郎

明治四十三年八月一日

略歴、大阪清水町に生る、

父は四世中村福助、大正五

年一月浪花座に中村政治郎

と名乗り初舞臺、古典座の

同人である

右の他、明治七年生れ(六十

一才)に森三之助、明治十九

年生れ(四十九歳)に尾上菊歳

衛門、市川照蔵、澤村哥川、

中村吉之丞、花村幹雄、明治

三十一年生れ(三十七歳)に

高屋高助、坂東市太郎 坂

坂東新七、辻野良一、明石潮

伊井友三郎、五月信子、村田

美彌子、明治四十三年生れ(

二十五歳)に市川染五郎、大

正十一 治生れ(十三歳)に尾

上右近、阪東又太郎等がある



# 八犬傳一夕話

倉田啓明

昭和九年の戌歳に因んで、「八犬傳」が出る。久しく忘れてゐたこの芝居である。殊に中座では古風な表飾や、古式に則つた行事を見せて、大いにむかしの芝居情調をたゞよはせようとの工夫で、狂言もそれにふさはしい珍らしい古風なものといふ意味から、これを選ばれたのであらうか——何にもせよ、久しくお目にかゝらなかつた芝居を見るのは、舊知に邂逅したやうな、懐かしさをおぼえるものである。

「里見八犬傳」を通し狂言として、大劇場で演ぜられたのは、小生の知る限りにおいて一度もないたゞ、時々「對牛樓」と「芳流閣」の場が、獨立した一幕物として見たことがあるくらゐのものだ。かつて新聲劇が樂天地に據つて、定打された頃、これを連續的に上演してはどうかと庄野主任や栗島狭衣君に奨めたことがあつたが、何分あの衣裳髪を踏襲しなければ、「八犬傳」にならず、それが新聲劇の俳優とはどうもピツタリしないので實現されなかつたことがある。小生が「八犬傳」を見たのは、東京で川上貞奴が「芳流閣」を演じたのを最後として、その以前、歌舞伎座で「對牛樓」を見た記憶がある切りだ。但し大阪ではどうかこれは知らない。

曲亭馬琴の原作「南總里見八犬傳」は、いふまでもなく支那小説の「水滸傳」の翻案である。作品としての面白さは「水滸傳」に團扇を擧げるが、然し「八犬傳」だつてあの大作を書いた、馬琴の精力は尊敬すべく、今日でいへば大衆文藝に相違ないが、その空想力の奔放自在さと文藻の豊かさ、變幻

## 中座初芝居

### 總配役

初春唯一の大歌舞伎中座の古式復興の初芝居は正月二日初日で蓋をあける、午後三時開幕で、出し物は前狂言「南總里見八犬傳」二幕、中狂言「鏡山舊錦繪」草履打より仕返しまで、次狂言「小原女と奴」長唄囃子連中、切狂言「心中宵庚申」二幕、大切景事「名大津筆彩」常磐津連中等でどれもこれも珍らしい狂言揃ひ、殊に「八犬傳」は屬治郎三十年振りの上演である。五年振りに上場される「宵庚申」も屬治郎の近松物の中「紙治」等と共に定評のあるもの又大手笹での手打の景事等何れも興味をひく陣立である左にその總配役を掲げる。

極まりなき場景の展開など、到底今の作家の及ぶところではない。同じ馬琴の作でも「椿説弓張月」は、「八犬傳」よりも短いけれど作品の價值としては上にあるといふのが定説らしい。然し小生はやはり「八犬傳」を彼第一の傑作否徳川文學中第一の傑作であると考へてゐる。

さて、「八犬傳」はじめ

「弓張月」「近世説美少年」「俠客傳」など由來馬琴の釋史野乘は儒教道徳を固執した、勸善懲惡主義が基礎になつてゐるので、この點毛嫌ひする人もあるがその仁義禮智信一天張りの馬琴も、作品の中では随分卑穢極まる場景や、慘虐讀むに忍びない場景を描いてゐる。

一々例をあげるのはよす

と題し長篇の通し狂言で、正月から二月までが「芳流閣」まで三月から四月へかけて「對牛樓」まで上演したのだつた。役者は瑠寬富十郎、仁左衛門等、ほとんど上方梨園の大立物を網羅した大一座である。



が、「八犬傳」にもかなりさうした個所があつて、それを例の勸善懲惡の金看板でカモフラージュしてゐるのだ。むろんこれは俗衆對手の小説であつてみれば、亦已むを得ないことであらう

「八犬傳」がはじめて舞台にかつたのは、大阪も江戸も同じ天保七年、大阪は中の芝居で、西澤一鳳が脚色して、「花魁茗八總」

犬山道節、八百屋半兵衛（鷹治郎）、犬塚信乃、中藤尾上女房千代（福助）、犬田小文吾、座頭（右團次）、召使お近（吉三郎）、犬江新兵衛（政次郎）、金谷十郎（駒之助）藤娘（芳子）、細乾左母次郎召使お初、姉おかる（魁車）娘濱路（成太郎）、悪者丈太偽四念（九團次）上田村の金藏（箱登羅）、召使お霜、母おみれ（蓮女）、犬飼見八（壽三郎）、犬村大角、平左衛門（市藏）、犬川莊助、同岩藤、八百屋伊左衛門（友右衛門）お千代の方（錦吾）、田鶴娘、丁稚松藏（廣太郎）、大坊（段猿）足利成氏、大坂毛野、小原女、奴、甥の太兵衛（三津五郎）——。

江戸の方は、同じ年でも少し遅れて、森田座で海老藏はじめ、やはりかなりの大一座で演じたので、これは三升屋三郎などが合作の脚色で、大名題は「八犬傳評判樓閣」といふのだつた。これも非常な長篇の通し狂言だが、いかに馬琴の原作が、當時評判であつたかといふことは、その大名題を見ても知れる。

何分、原作は白〇六卷、馬琴が二十八年間心血を灑いで完成した大作で、これがために盲目になつたほどだから、世評も高く、猫も杓子も争つて讀んだものらしい。里見伏姫と愛犬八總との間に生れた、犬山道節、犬塚信乃、大田小文吾、大飼現八等八犬士の名はいふまでもなく、網干左母次郎、船蟲、濱路、房八等の主なる登場人物の名は、明治時代になつても親しみ多く、人々の間に喧傳されたものである。

その後、明治になつて河竹默阿彌も、三世河竹新七も、「八犬傳」を脚色上演してゐるが、前二者に比ぶればよほど短いものだ。今度中座で上演されるのは、どの脚色を骨子としたものか、またどんな場を誰が演ずるのが、全然不案内だから、これについては何事も語れないのを遺憾とする。さもあれ、「八犬傳」でおもしろいのは、やはり「芳流閣」と「對牛樓」と「對牛樓」、殊に犬塚信乃が女装して、仇敵馬加大記を討つところであらう。さればといつてかうした長篇大作を一幕や二幕上演したところで、結局興味索然たるものであり、さればといつて今日の情勢通し狂言にして見せたところで、現代の觀衆には悦ばれず、とどのつまりは下積になつて忘れられる芝居なのである。だが、この荒唐無稽なる稗史野乘を、面白く演出しようとするれば、彼の「大菩薩峠」式に、一應現代の大衆文藝として検討し、濾過し、それを大衆の興味本位に脚色するより外はあるまい。

## 初春興行の

### 各座觀劇料

御慶事奉祝氣分で新春を迎えて賑ふ芝居街は、何れも陣容を整えて近來にない盛観であるが、各座の觀劇料は左の通りである。

◇中座、芝居古式復興の大歌舞伎、鷹治郎を始め福助、右團次、魁軍、壽三郎、市藏、東京から友右衛門、三津五郎等の一座で、二日初日午後三時開幕初日觀劇料特等四圓二十錢、一等三圓五十錢、二等一圓八十錢、三等一圓三十錢四等八十錢、五等五十錢

◇浪花座、新國劇元旦初日午後四時開幕、特等二圓三十錢一等椅子一圓三十錢、二等一



# 八犬傳雜話

高谷

伸

現今大衆文藝の名を以て呼ばれる通俗文藝と、純文藝作品との限界は、いろいろ議論のあることと思ふ。

曲亭馬琴の「南總里見八犬傳」にしても、波瀾曲折の興味は大衆文藝として上乘のものであるし些か術學的であるとしても、その行文の妙は、純文藝としての價値を疑はるゝものではなく、その量に於ても日本文學史上稀に見る長篇である。

馬琴の時代に於ては、今のやうに純文藝と大衆文藝との論争の無かつた譯ではない。寧ろ、馬琴は自ら高く居て、山東京傳などを通俗作家として見下してゐたのだから、八犬傳を大衆小説だといふ人があつたら、地下の馬琴から抗議が來るかもしれない。

もし、馬琴に言はせれば、純文藝でも退屈なものには仕方がない。退屈させないで文學的價値のあるもの、それが最高のものだと言張するであらう。

それ程に八犬傳には物語としての面白さを多分にもつてゐる。勿論、八犬士が一團になつてから一班の軍記物めいて興味を減じるが發端から人士の相逢までが十分に面白い。

それだけの豊富なストーリーを古來からの歌舞伎人が等閑に附する筈はない。随分脚色されて演ぜられてゐるが、何ぶん長いものだけにその全貌を通し狂言として演ずることはできないので、断片的に出されたが、一番多いのは犬塚信乃の女装の件、次が犬山道節の村雨丸の銘刀、それから大阪毛野の復讐などであらう。犬田小文吾の鬪半、犬村角太郎のグロ物語などはあまり芝居にならな

圓、三等七十錢、三階大衆席五十錢

◇角座 新組織の新派劇で元且初日晝夜二回開演初日ヒル十一時開幕一等一圓八十錢、二等八十錢、平場椅子席五十錢

◇文樂座 人形淨瑠璃一座總出演で元且初日午後二時開演初日値段一等二圓、二等一圓三等五十錢、一等座席二圓五十錢

◇歌舞伎座 三十一日初日午後一時より松竹オールトキー東洋の母キートンの麥酒王栗島すみ子演「春は明かに」等で開演、元且より午後八時上演一等二圓、二等一圓二十錢、菊七十錢、櫻五十錢

つたやうである。

その八犬傳も近來あまり舞臺に出なくなつて、自分は、たゞ一度より見たことがない。それは二廻り前の戌の年、明治四十三年一月の南座だつた。大阪歌舞伎の中堅によつて八犬傳が演ぜられた。芳流閣と圓塚山の刀賣りが中心で、道節の太百姿が立派だつた、そして八犬士がすつかり顔を揃えたのだつた。その役割は、

犬山道節	實川延二郎(現延若)	犬江新兵衛	片岡太郎(齡藏)
犬塚信乃	中村成太郎(現魁車)	犬田小文吾	嵐吉三郎(先代)
犬飼現八	片岡我童(現在)	犬村角太郎	嵐瑠(故人)
犬阪毛野	嵐璃徳(現在)	犬川莊助	尾上卯三郎(故人)

である。その他に今の壽三郎が阪東長次郎の名で網干左母二郎と管領定政實は越杉駄一郎を、先々代鷹童が濱路を勤めて彩りを添えてゐた。

その時の中幕が小栗で二番目が油地獄、切が雪月花で伏見の常盤と江口の吉辰り駕であつた。延若魁車我童壽三郎と現在の大阪劇壇の中心の人々が賣り出しの花形として活躍した顔合せが八犬傳であつた。

大阪歌舞伎の復興の叫びの多い時久々の八犬傳が出るのも、里見家の非常時を背負つて八犬士の活躍した意氣が偲ばれぬでもない。今度は延若我童に福助を代へて、鷹治郎も出るとも聞いてゐる。さうなれば馬琴の原作を憶ふ大舞臺となるだらう。

古式復興もうれしいことである。昭和九年の春を基點に上方劇壇のために結束して、八犬士となつての奮闘を期待する。

讀書として挿繪として、また遠い物語として眺めてゐた八犬傳が道頓堀の舞臺に展開されることは劇壇近來の興味を喚ぶことであらう。



# 八犬傳讀流し

高原慶三

干支に因むで初春芝居に「八大傳」と定つたと聞いて、帝國文庫を取出して、さて一遮千里に馬琴の「南總里見八犬傳」を読み流してやうく一週間目に古那屋の房八、小文吾の件りまでやつと漕ぎつけた、これでまだ三分の一も來てゐない、道は遠い、うんざりしてゐると、こんど芝居に出るのは圓塚山と芳流閣、主として犬塚信乃、犬飼現八、犬山道節、犬川莊助の活躍する件りだと考へると、モウそれから前途を読む氣もしない、八犬傳は辛抱第一と誰やらいつたが随分勝手な話だがまづわれら初見の芝居を見る準備にか

くも苦勞してゐることを一言いさせてもらう。



ところで、さて冒頭から「八犬傳」を読むと、今まで常盤津で聞いてゐた「富山の段」なんか、テンで何の事だかわからずに聞いてゐたのが、ハツキリとその來由がわかつて自分自身にとつて非常な勉強になつた。

自分は會て京都の先斗町の濶習會でこの「富山の段」の舞踊を初めて見たが、伏姫と童子がどういふイキサツかが何やら隆張りわからずに見たこと

が悔まれた。

菊の花ざかり、白い衣きた伏姫、それが水鏡にうつる犬の顔——てうど「狐火」と同巧のものだと思つた、たしか舞人は篠塚流の妓だつたと思ふが、篠塚流では「狐火」といひかうしたお芝居が、つたものが大物にあるらしい。篠塚亦珍重すべし。



恥しい話だが、私は「八犬傳」といふ芝居は「芳流閣」の立ち廻りを神戸の松竹劇場で見たほかはテンで見えてゐない、それもその筈だ、たしか今から



廿五年前市村座で菊吉若かりし頃に來た切りだから、こんど鷹治郎等によつて何年ぶりに出ると聞いて、實に胸がワク／＼する程樂しみだ、いわゆる待望といふ芝居は續々やつて頂きたい、かういふ芝居は續々やつて頂きたい、次は自雷也なんか賛成ですな、

◇  
こんどは無論發端の「富山」は出な

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品

國產金鶴印

ウキスデキ  
ブルモンツ  
ベニルモツ  
キユミラソ  
ベニミラソ  
ジバミラソ  
滋養葡萄酒



元質發 店商山横 株式會社

大阪市東區豊後町三番地  
電話東(94) 一六六一  
二〇一三  
四六四九

いのでせう、まづ「村雨」の寶劍をめぐる犬塚信乃と濱路、額藏をうして左母二郎、それから圓塚山の犬山道節の火定の場、濟我の館、芳流閣あたりが出るらしいが、私が何より期待してゐるのは圓塚山です。  
大百日の道節は晝面通りにまづ鷹治郎の役でせうが、これが立派さ天下一でせう、これが火炎を背に不動のやうな見得で火定から火遁の忍術をつかつ

◇  
てドロ／＼と現れる場面を想像しただけでも隨喜の涙がこぼれそうです。讀本だけで既に舞臺が想像される、まつたく馬琴の筆の威力です。  
とりとめもない事を書流して恐縮です、こんどの「八犬傳」に對して私は尋常一年生のつもりで勉強したい、その用意を茲に申述べるに止ります。



歌舞伎座上演

# 春興狂言がるた

小山紅露

「初曆、春を新派の魁けてこゝにワンサと成年の歩けば棒に當り狂言、並べた花の繪がるたに讀み手取り  
手は持ちもちの腕くらべ、まづ一番に上るものは歌舞伎座藏入りの榮」と角書もどきのはし書をして：

## 書の部

第一 新てるて姫

春駒や昔振りなる手染綱

曲馬乗のお濱

河合武雄

第二 葵の上

古鏡秋の螢と思ひしは

藝妓勝次

喜多村縁郎

稻妻や何とはなしに怖氣立つ

藝妓お榮

河合武雄

いつも来る按摩の息の夜長かな

按摩

大矢市次郎

第三 不如歸



夜の部

初刷の口繪にもせん藤たけさ  
麗かある日の隔てなき集ひ  
國訛り水仙にある冷やかさ

「新郎新婦」の浪子  
「夢見る日の」山に  
「病苦」の千々岩

花柳章太郎  
伊志井寛  
白河青峰

第一 露のあとさき

虫籠ややきもきしても蔭の人  
子への情世間への義理夜長かな

田毎の女將おすて  
旦那手塚

河合武雄  
大矢市次郎

第二 補助椅子

春の夜の人心思ひくかな

小唄の師匠

喜多村縁郎

第三 俠艶

愁嘆も師匠ゆづりや秋裕  
向島の名も新らしく都鳥  
七轉びしての八起や福壽草  
ほがらかな中に味ある歌留多哉  
双六や振り出しからの鮮やかさ

坂東力枝  
瀬尾富士雄  
太夫元土岐  
弟子梅代  
ぼたんの吉

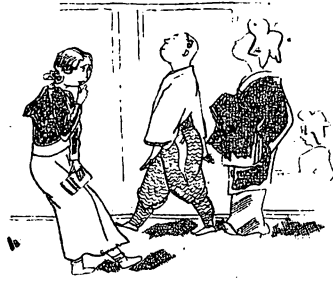
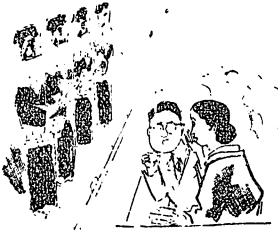
花柳章太郎  
梅島昇  
小堀誠  
英太郎  
花柳喜章



平場漫景

妹脊平三

「ねエ賞方！あの大手笹せ  
ッても何あに？」  
「僕も始めて見るんだが」  
「あれはネ……皇子様御誕  
生の……あの御祝ひよ」  
「ウムそうか……つまり奉  
祝踊りだな」



廊下漫景

妹脊平三

きゆうくつな洋服をぬいで昔  
懐しいカルサン姿の案内係そ  
れに續く藝妓ヘンのあのまあ  
シャンとした事わいな……て  
……洋装……インテリ嬢いさ  
さかテレたデス

観覧席

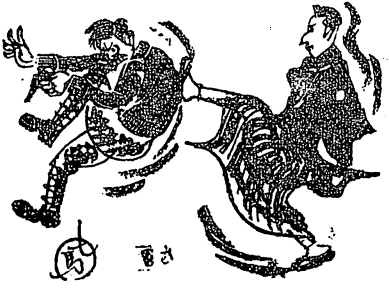
大槻たもつ

おざぶ買ふて、お  
ぶのんで、おべん  
たべて、且さん  
いさはん、ご寮さ  
ん、ぼんち、新年  
宴會らしいサラリ  
ーマン連中に春芝  
居の賑かなこと。

武器!!

酒井七馬

兇悪なる暴漢も有名ならざる俳優の足に



か、つて  
は、一た  
まりもな  
く参つて  
しまつた  
!!(あま  
り有名で  
ない、役  
者の事の  
何さかの  
足と言ふ  
じやござ  
んせんか  
れだどそ  
はなし

こんな場合

酒井七馬

ヘレスコープ(屈折眼鏡)の質貨があれば  
便利だと思はんデスカ、諸君——!!



舞敷漫景

妹脊平三

ダンス舞者ではダンスンNO1の彼女  
も中座の古式復興劇では、その存在な  
すら認められんデスカ



お茶子さん

秋田 收一

総敷で飲み食ですか……  
 お江戸の御方がお聞きやしたらそんなべら棒  
 なことあるかさ言わはるかも知らんが、我が  
 道頓堀に興へられた特典(?)だつせ  
 お酒の二三盃も上つて、ホロツとしながら見  
 物するなんぞはとてもお芝居気分百パーセン  
 トだんな  
 當節は前方と違ふて床掛けるお客はだんく  
 少くなうなりましてサツパリあきまへん  
 『一寸熊やん！出孫三番の  
 お客さんのマント預かつ  
 さんか……』



初曾我

山崎喜一期

曾我兄弟は松火のあかりで工藤の館  
 へ忍び込み無事本懐を遂げたが、文  
 明の今日だつたら、文明の今日だつ  
 たら、必ずや明滅自在の懐中電燈を  
 選んだであらう。



初芝居

さても女の  
 並びけり  
 山崎唯一朗

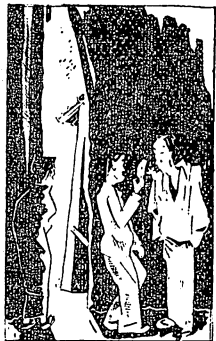
舞臺裏

大槻たもつ

ライターの火に衣服つけ  
 て『わてまだか』と春の芝  
 居のまんびりさ。

はつはがくのはつはが  
 1934年樂屋異聞

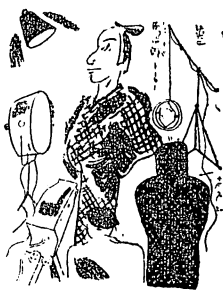
富田英三



はつはがくのはつはが  
 1934年樂屋異聞

富田英三

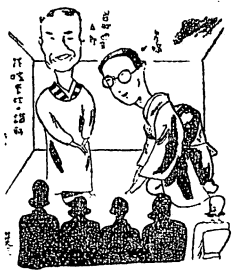
No.1 雁治郎主演音書『河庄』

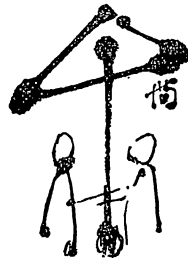


かぶきの大御所雁治郎がトキキ  
 ーに出ると言ふんです。  
 尤も、何にしても七十幾歳の老  
 優、たとへつて七ツハツの娘  
 (さらさら孫娘ではない、デスツ)  
 があつたとてふいるむは正直に  
 雁治郎のおごのくびすぢのしわ  
 をかくしおほせるものではない  
 と云ふんでクローズ・アップに  
 は娘むこの長二郎を、科色はさ  
 しずめ三龜松あたりをぶろんぶ  
 たあに使ふんださうで……

No.3 花嫁学校の講師に  
 なつた五郎

大磯、桃蝶、秀蝶と女形王國を  
 誇る、曾我廻家一座が日頃の思  
 想報國つて譯で、國防婦人會あ  
 たり委嘱を受けて花嫁学校で  
 花嫁の行儀作法一般を教授する  
 ことになるデス  
 『旦那さまがお歸りになつたら  
 からしてエロツぽく出迎へる  
 のでございませうよ……』  
 と云つた風に……





# 心中宵庚申に就て

長野吉高

心中宵庚申が享保七年、始めて世に貽られたことは周知の通りである。實に大近松の七十歳の作で、近松はその翌々年、即ち享保九年七十二歳で亡くなつた。

事實上、近松の心中物はこの宵庚申で絶筆とも云へやう。時代世話物を通じて、近松の作になるものは百數十種と普通に云はれてゐるやうだが、然しこれは嚴密に云つて、餘程に吟味を要することだと思ふ。恐らく其の筆になつたものは、百種以内か、或は百種を何程も出でず、他は別な作家のものが混入してゐると見るが妥當であらう。そして其の作に於ても、全部が全部傑作とは云へない。眞に傑作とも云ふべきは中での十餘種をちこちで、これはたゞに近松のみでない。洋の

東西を問はず、大作家と云はれる人の作でも、傑作といふものはさう澤山あるものでない。かうした意味から見れば心中宵庚申も必ずしも傑作とは云へないかも知れぬ。

○

私は、演藝叢報の昨十月號誌上に「歌舞伎と支那劇とどこが違ふか」の題下に於て、近松の心中物に就き大要次の如く述べて置いた。一見の機を得られなかつた向もあらうと思ふから、あらためてこゝに重記してみやう。

「——時代劇と世話劇を問はず、何れも愛情ほどよく

描かれてゐるものはない。愛によつて活動し、愛によつて終始してゐる。近松がその人生に對して偉大なる悲觀を構へたのは愛情の變動によつて個人對社會、現實と理想との衝突を洞察したためである。だから、その描く愛情は極めて自然的であり、本能的で一度この愛情に理性がめざめて、そこに社會との衝突が起ると、愛の最後として死あるのみである。人はもとよりこの世を離れては幸福はないが、近松の悲劇はこの幸福を犠牲にすることによつて多く發生する。即ち、内面に於ける自然感情の宿命と、外面に於ける社會制裁とこの中間に煩悶して終に悲慘なる「死」に至るのである。然し近松には、かのシエクスピアにみるが如き意志と良心との間に於ける内面的煩惱とか、自然感情の抑壓、良心の先天的な權力などいふやうなことはない。それだけ近松の描く人物は、何れもみんな單純である。例へば、あの「冥途の飛脚」でも「天の網島」でもその通りである」と。大體以上の通りである。宵庚申の筋書は今更こゝに云ふまでもあるまい。たゞこれが近松從來の心中物とは、その人生に對する偉大なる

悲觀の構へかたに、多少の異なるものゝあることを忘れてはならぬ。そこに、この作の獨自の境地なり、價値なりが存在する。

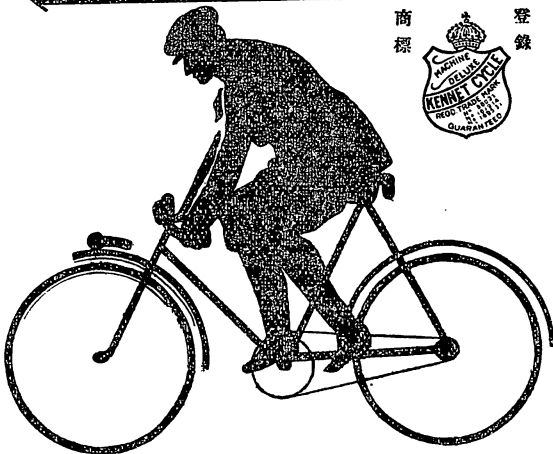
○

詞藻といふ方面から見れば、宵庚申が果して他の作より傑出するか否かは、多分に研究の餘善があらう。晩年の既に氣魄の衰へた近松としては、決して無理からぬことで、これを壯年の頃と比較すべき限りでない。ギリシヤ、ローマ以來、修辭上の詞姿は約三百種もあり、今日なほ必要視されるものが五六十種ある。我國の古文に就てこれを檢討するに、一人の作家で十種以上の例を見出すことは極めて勤いが、近松は特種なものを除いては大抵これを驅使してゐる——これは今日、多少とも修辭を學んだ者の等しく認めるところである。今度、中座で馬琴の「里見八大傳」が出るがこの馬琴などは一見如何にも詞藻が豊かなやうではあるが、然しとても近松には及ばない。たゞその構想の雄大な點に於て近松より一步の長があるに過ぎない。

宵庚申の道行の一節に「卯月五日の宵庚申死ば一所と契りたる、その一言は庚申云々」の文句がある。総じてこの道行は、さして上出来とは思はれない。ほうづきほどな血の涙云々」とも云つてゐるが、恐らく全篇を通じて、これが出色の文字だと思ふ。「その一言は庚申」など、近松も餘程苦しかつたのだらう。が、然しこれ等は詞姿から見行く場合の一例で、宵庚申の全的價值といふやうなことは別にあらねばならぬ筈である。

要するに、宵庚申とても意志と良心との内面的煩惱などいふことは描かれてゐない。従つて、その描かれた人物が單純に見え勝だがこれは近松の尋常手段で、宵庚申にのみ別に取り立て云ふべき筋合のものではない。たゞ前にも述べたやうに、對人生の悲觀の構へかた如何に重點があるので、宵庚申を舞台にかける俳優も、觀察もこゝに十分と注意をし理解をもつ要かあると思ふ。

# ケンネンツト号





當心服氣力柔弱者

大平  
卷世 平 打

打部外

番組

山 番 豊  
佐 吉 智

大手籠世手打

アンテン明かるくなるト  
舞台は金の通りにて上の方へ（大手）下の方へ（笹セ）の提灯、高張一對を出すシヤギリにて納る。

ト頭取羽織袴にて下手へ出で

頭取 東西々々、是よりは當座初春芝居、古きを持て新らしく聊か古式を真似ました、手打を御覽に入れ升る何卒應場の御見物お願ひいたし升る。

ト兩花道に向ひ

大手、笹世の御連中、舞台へお据り下さいませ。

ト本花道より大手の連中、假花道へ笹世の連中出て舞台へ來り大手組は上手、笹

世組は下へ居並ぶ。

囃子方前おかゝり下され。

ト是にてウタイになる。

春立ち見れば我宿に、まつ先き盛る梅の花

ト此内三番叟の連中舞台真中へ出て並ぶ。

所千代まで翁草、菊の色増す式三番、我等も千秋さむろうや

抑も萬歳と申者は。

手織木綿の素袍着て

廣瀬の浦を立ちいで、

二人 ヤア、田舎なまりのむくつけに、萬木、千秋の春を祝す、又世上の秋は七種の草を七々

三番叟

の社やしろに捧たすげし後のち、きいみに献けんじて長壽ちやうじゆを祈いのる。是こゝみな、かせん露月れいげつの嘉例かれいとかや。

一 跡あとの太夫殿たいふどのにチヨト見みぞう申まをそう

二 丁度てうど参まゐつて候まゐ。

一 今日けふの三番叟さんばんそう、誰たれがお打ちうちらにて候まゐや。

二 今日けふの三番叟さんばんそう、千秋萬歳樂しうきうばんざいらく、五穀成就ごこくじゆじゆ、所富貴繁昌ところふきはんぢやうと舞納まひなる事こと、何なにより持もちて安やすう候まゐ。

一 去されば候まゐ。

二 まづ尉べつどのには御元おんもとの座敷ざしきへ御直おんなほり候まゐへ。

一 我々直われくくなほする事何ことより、安やすう候まゐ、キリ／＼チヨンと手打御始てうちおんはじめ候まゐへ。

二 御直おんなほりのうては御始おんはじめ候まゐまじ、まづ御直おんなほり候まゐへ。

一 御打おんうちチ候まゐへ。

二 御直おんなほり候まゐへ。

一 ア、ラ、ようがましや、去さアらば手打てうち始はじめ候まゐふ。

二 こなたこそ。

一 〽ぞうさへ／＼悦よろこびありや／＼我思わがおもう悦よろこびを外ほかアへはやらじと思おもう。

一 〽偽にせ紫むらさきの中なか々に及およばぬ筆ふでの寫うつし繪えに——池いけの汀みぎさの石龜いしかめや、本ほんに鵜うの眞似まね、鶯うぐいすとび

一 ヒイ／＼ヒユリヤロ、とつばひとんに、あしやしやんのしやのや／＼、エイ／＼、エ

一 イのヤアチヨン／＼／＼、コロリ、カラリ、コロリ、カラリ、コロヤカラリヤ、ヤチ

一 ヨン／＼／＼。

山 寺

一 去アらず錦を渡した。 二 請取つた。

一 はんま松の。 二 音も拍子で。

一 チツボカツチリコ。 二 チツボコツツリコ。

一 カツチリコ。 二 コツツリヨ。

一 カツチリ。 二 コツツリ。

二人 アヤリヤ~~~~~。

一 千兩じや。 トドロツクドン 二 万兩じや。 トドロツクドン

一 千兩。 二 万兩。

一 千兩。 二 万兩。

二人 アリヤ~~~~~ありやせい、祝イ升ふ。

ト木につれて元の座へ戻る。

山寺の春の夕暮来て見れば、入相の鉦花や散るらん

ト禪のはやしになり山寺の連中肩中へ出る。

女一 申し坊さんへ。

女二 あなたはどちらへおいきかへ。

僧 愚僧は丹波の篠山へ。

女一 私しらも一ツ所に行きたいな。

僧 坊主のつれには女は無用。

二人 エ、どうよくな和尚さんじやな。

僧 そんなら来い一ツ所に来い。

住  
吉

三人 山寺の和尚さんは鞠は蹴りたしまりはなし猫を紙袋へどしこんでボンとけりや

ニヤンと啼く。

女一 ボン。

女二 ニヤン。

二人 ボン・ニヤン／＼の田樂が喰ひたいな。

僧 年シ三ツ。

三人 祝イ升ふ、ヨイ。

ト禪の勤めで山寺の連中は元の席へ着くと、

いで行き升ふ、住吉へ藝者引つれて

ト是にて住吉の連中居並ぶ。

(木打) 廣田を放れ今宮や、早天下茶やになりけり。

駕一 旦那お駕はどうでムリ升。

旦那 何だ駕か、私は大阪は始めてじやけふは、住吉へ參詣したいと思うが案内してくれるか。

か。

駕二 へえ／＼どうぞお乗り下されませ。

旦那 ソシテ駕賃は何ぼじやナ。

駕三 オイ相棒何ぼで行ふナ。

駕四 サア、やみはどうでムリ升な。

旦那 何じややみ、やみは高い、月夜にまけておけ。

大手笹せ手打

駕一 オイ相棒、月夜て何ぼじや知ているか。

駕二 おりや知らぬが。

駕三 モシ旦那月夜とは何ぼでムリ升。

旦那 お前方のいふやみとは何ぼじや。

駕四 やみといふ升のは、三十日はやみ、それ三百文といふ升のじや。

旦那 ア、そうか。

駕一 旦那のおつしやる月夜とは何ぼでムリ升な。

旦那 月夜といふのはソレいろはたとへの月夜に釜をぬかれたといふから、たゞじや。

皆 何じやあほらしい。

旦那 イヤ、コリヤ笑談じや向ういたら酒手を張り込むやつてく。

駕一 オツト合點相棒肩しよ。

駕二 合點じや。

ト木になり鳴物唄にて

旦那 けふはよい日和じやナ。

駕一 へえ向うを御ろうじませ。

駕二 よい景色でムリ升ふ。

旦那 向うに見えるは何じや。

駕一 アリヤ淡路島でムリ升。

駕二 アノ島の向うが朝鮮でムリ升。

旦那 何じや白イのが見へるのは、  
駕一 アレは帆かけ舟でムリ升る。

沖にちらく帆かけ舟

(木打) 一丁も二丁も五六丁も、早住吉になりけり

旦那 是が住吉でムリ升。

旦那 是が住吉か、立派な事じや、賑やかな事じやなア、オ、向うに見へる橋は何じや

駕二 アレは反橋でムリ升。

旦那 アノ反橋渡れるか。

駕一 渡れ升共く拍子を取れば渡れ升。

旦那 そんなら私しも手傳わう。

駕一 拍子を揃へて。

皆 渡り升ふ。

(木打) かんら傘くかんら笠を開けてかみの裂レを取り巻いて、大きな聲を張りあげて、

住吉岸の邊の茶やおりたてと松につろやれ蛤を沖で高いは高燈籠エ、住吉さま

の、岸の姫松目出度さよいまめ御祈禱御家内御繁昌芝居も大入末はんじやうと御目

出度や

ト後はどなれにて、住吉の境内になる手打連住吉踊りの内、シコロにつれて、お  
かめ、ひよつとこ、の連中出で踊りながら向うへは入る事よろしく。

打出し。(大川渡江綴)



あさ霧はフカク垂れ。ち。ち。ち。と  
 四條の河原に千鳥が啼く。聞くだに慕は  
 しい萬人待望の歌舞伎芝居の豪華版、京  
 都の年中行事顔見世興行が、吉例の師走  
 朔日ゴゼン九ジに華々しくフタをあけ  
 た。

これを見なかつたら、親類縁者や町内  
 へハバが利かぬとあつて、浴中浴外の若

いムスメや、おかみさんがキレイに結ひ  
 あげたアタマの髪を気にしながら、ピュ  
 ーツと横なぐりに吹きつける比叡嵐に雪  
 の肌をさらして二十四時間家族交代の立  
 番で、一日のクワンゲキに永遠のイノチ  
 を賭けて切符を求めるさま、スツカリ關  
 西の早慶セン。

足を踏まれた男ちぢみ上り。「足の一  
 本ぐらいいは呈げるから、もつと前へだ  
 してくれ」  
 章魚ほど思ひきりがいゝ。

バスケットを捧げた有皺マダム、長蛇  
 をかきわけ涙を滲まし、

「近國のひとはまたみられます、廣島  
 からワザ／＼きたのですから、一枚だ  
 けトクベツに……」

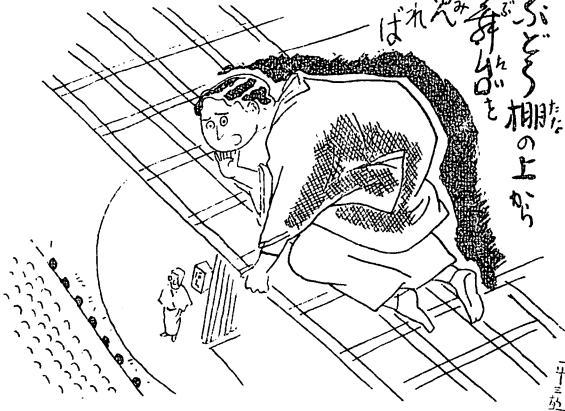
テケツへしがみついてテコでも動かぬ  
 が。すでに賣切つて蟻のはいる場所も

ない。

涙脆い藤井主任。「いつそ葡萄だなの

ぶどう 棚の上から  
 と舞い降り

ばれん

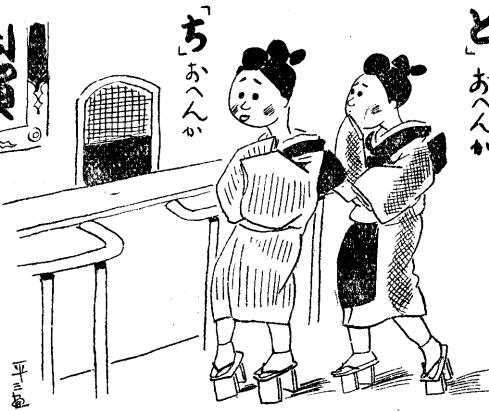


上から、覗かさうか」 鼠やがな

京の四季の文句にあるやうなべべ。身



演劇



「とおへんか」

「ちおへんか」

體よりまだ大きな糸錦の帯、熱れた母の  
 ことき類、ガラス箱の京人形も跣足でに  
 げたすほど、きらびやかな舞妓が、東西  
 の兩棧敷へズラリとならんで、花簪を  
 チラつかしたところは、東京や大阪では  
 ユメにもみることのできぬ豪華版です。

平三郎

シロ衿の姉妹たちはソノうしろか、或  
 は、いろは順に背中へ番號うつた椅子席  
 をとめねばならぬ。  
 古風の髪を結ふた、まだ頭是なき色街  
 のおチヨボが曉がたの霜を踏むでカタコ  
 トと高下駄で南座へつめかけ。  
 い、ろ、は、に、ほ、へ、【と】、おへ  
 んか——、ウチとこ、【ち】、慾しおす。  
 恰で寺小屋。

豪華な姿の彦三郎、道後工衛門の片ツ  
 方の髻がおちかゝり、兩手でコ擦りつけ  
 つゝなるべくウシロ向にしばゐして。

「シヨクンは顔見世、ボクは裏みせで  
 ……………」

……今日のご祈禱なり………………。翁  
 と千歳がはいった。  
 豪華な鳴ものは、タツボくと三番叟

の出を促せど、ハコのうしろへ挿した栓  
 がぬけぬ。  
 かんしゃく三番叟



蝶番をはづして、ヤツトのことでアタ  
 イへ出た猿之助、はい顔で頭ごなしに  
 八ツ當り。  
 弟子どもも變テコな顔。  
 「ね君、三番叟の怒りッ顔テナものを  
 みたことがあるかい」

鴈治郎と幸四郎との、肺と心臓は東西マレな豪華なものと、宇野醫師がダングンした。

カゼひとつひかぬ松本幸四郎、やくしやに唇日なしと、ネンが年中はたらき通す。

コンドも顔みせへきて、綾小路から水菓子をもらつた。

弟子の六七、祇園石段下の八百文のマークをアナのあくほどみつめて生唾をのみ。

「八ヒヤクもんはペラ棒に安いや、東京だつたら八圓のしろものだ。」

二十イク年間、ハンコで押したやうにヒルの一番目をうけもつた中村福助が、松島とともにヒルばての土蜘蛛から顔をだす。

市藏、莚女、吉三郎は出場が異うからがくやでもめつたに會はぬ。  
「小春さんにおことづけ  
おまへんか」



善六、太兵衛の箱登羅と九團次。  
「河庄で小春さんにあい、ますが、こと

づけはおまへんか」

片山流の家元、木村おさださんが肝いりで、桶地ちりめんへ、市川左團次後援會と白ヌキの三舁の定紋いりの大織は、帛といひ房といひ、棹の尖はピカツと先つて都に稀な豪華なもの。

伊勢市も、吉右衛門のためにコレに遜色なき揚羽の蝶の紋ついに幟をたて、加茂の川風に翻へし、扇根の上には吉例の竹矢來へ各優のマネキかんばんをあげ。部屋へはいると、乃木將軍ゲキの軍帽、グン服、靴、ラツバ、サーベル。

大森彦七、二條城、千本櫻の鎧、兜小手脛アテに馬がところせまきまでに飾られ、吉右衛門のへやには、三菱の木村久壽彌太から贈られた、朝鮮征伐に加藤清正が愛用せし、レイの鎧通しの銘刀——南座の内外は宛ら武將の出陣のごとし。

まさに『非常時』高麗家さんも大森の  
てまへ、菊水の紋ついた積ものは如何。  
三舛さんのために、屋根の破風へ解脫  
の釣鐘なんかは趣向だが、坂田金時の段  
四郎クンも立教大學の覇權の自慢ばなし  
も時候おくれ、赤いはらあてして、四條  
の大橋で大鉞をふりあげるがよからう。

何んといふても鴈治郎の河庄の治兵衛  
は、海内無双の豪華版デス。

二ツ折のかづらの上から淺黄のてぬぐ  
ひ頬冠り、立縞の納戸お召のキ附、中二  
本筋の帯へ小刀をまへざしに。

……。魂ぬけてトボくの床につれ  
花みちの七三で、チリガン、チンく、  
と脱げた草履を穿き、水の滴るやうな顔  
をうつとりと後ろへ向けたところは筆舌  
ではつくせぬ入神の技、けんぶつは、た  
ゞモウ片唾をのんで眼を皿のやうに剣い

てゐる。  
鴈治郎 松原通りの松田旅館で、陽な  
たばつこ。  
『大衆から、絶讃を浴びるのは、藝術  
にまだスキがあるから——眞まに巧か



つたら 鶯の初音でもきくやうに、咳ひ  
とつせず、幕がしまつたらホツと肩息し  
てゐる……』

芳子はんケゲンなかほ。

『そやかて、わあーッとこんと、張り  
合がないわ』

『あッ、しやうがないナ』  
いらんことを言ふから叱られる。

政治郎、染五郎、遊舛、段四郎、もし  
ほといふ悪垂れならぬゴ曹子のゴ公達。  
二百餘名の俳優があつまつた豪華な大  
一座のおかげで、究屈な親どもと部屋が  
別になり、籠をはなれた鳥のやうな氣に  
なつて、『雪の新海吹雪にくれて、トン  
リンシャン、佐渡は寝たかや灯がみえ  
ぬ』

梅幸、老の眼を 隣き。

『榮三郎が生きてたら、馬士唄でもう

たはふに」

三吉であるまひし。

回

魁軍はんのへやへ、ネギ、ベツコウ、  
麩、ウド、しい茸、百合根、くわい、タ  
マゴ、おろし、ムラサキから砂糖まで至  
れりつくせりの豪華な鶏鍋がきた。

ソレが大道具部屋へさがる——。

じ、じ、じ、とたぎるなかへ鶏の脂を  
いれるとバチ——。

乃木將グンがあらいたと思つたひとりの  
道具方、エレベーターで舞臺へかけあが  
るとまだ松浦。

また降りてコクリ——船を漕いでゐる  
と、コンドは旅順塹壕の小銃のオトがバ  
チ——。

「スキ焼が、バクハツしとる」と平氣  
なもの。

ダークチエンヂの舞臺ウラでは手不足

てんやわんや。

回

須藤紀六、長濱保といふ陸軍歩兵四  
等ソツから。

營舎の擧手の禮がまちがつてゐる。壽  
美藏の保典少尉が、司令長官たる乃木將  
軍にアマエルなんかは軍規を紊スものに  
して武人の風上へも置けぬ演出なりとの

ゴ注意。

ソコが芝居で、活殺でも斬りつけてゐ  
るやうで、實はさるまじとつとめねば形  
にならぬ。

保典の場合は、白井中佐のセリフで、  
ハツキリ答めてゐますから……。

耳をすました中村時藏。  
「豪華な借金のあるひとは、暮の言ひ  
ワケに頼むがい——」

回

京都エキにウラおもての開いた鐵のハ

コ。

適つきり、通りぬけと心得。鞆を携  
てはいるとソレが貨物エレベーターだつ  
たのでスツと空ラへ吊りあげられ。

「助けて呉れツ」

と悲鳴をあげた中村蝶五郎、モウそん  
なキケンなところはイヤとあつて人足し  
げからぬ東山をブラつき、尿のコディン  
ションは上乘、あたりひともし。片足  
あげたら犬だが、ソコは人間。オモムロ  
にオ不動さまちかき六根清淨の地へ、一  
糸みだれずジャーツ。

鳩のやうな純眞無垢の少女がうしろで  
クス——。

足を掻いてゐるといふ工合に胡麻化す  
と、温マ湯は股間を傳つて裾ハンブンか  
ら指頭までズク——。

はつと直立、ホースは松の樹へ向けら  
れ、ソノ匆ね返りでマントの裾に晴天の

新に

晴天の洪水

洪水。

しよんぼり南座へもどつて。

「京のあさ露は温イよ」

元祿忠臣ぐらで、古今の大入をしめた



壽三郎、扇雀、等々の精鋭が、やはり浪花座へ楯こもつて、瀬川春郎つくるところの豪華版、荒木又右衛門を上場——めい／＼切つて儼めたやうな役でカツヤクの効あり再び日のべはめでたし。

壽三郎ユーモアいりで。

「こんどは曾我でせうが、勝つてばかりもならぬから、偶には返り討にも遭はんと……」

霞仙すかさず。

「むりでつせ——、その豪華な恰幅では……」

一日にいつべん、慶應大學のことを言はなかつたら、口のなかに虫かワクといふ奇病に罹つたコレも豪壯なからだの嵐橘三郎、ちかごろの外野ぶり天晴れなるものあり。

「時に應じ機に臨み、神變ふしぎの球

をもつてますね」

「らい年は負けまつせ」

「なんで？」

「それ、イヌの年ゆへ、ワン、バンドで送らんならん」

戦へり——、捷てり——。

アスは健棒をほこる大丸チームと戈を交え、プレーとともにコレを撃破せむとす——。

應エン團は須く、テンプラ食つて明日の舌戦に備えられたし——。

機瞬間去、不入間撃——。

以上のやうな文句をなには座のがくやの壁へ貼つてゐる。

不例休養中の成太郎がやつてきて、棒フク、デットウなことをかきそへる。

——、されど、併殺を急ぐは策の拙なるものと知るべし、もつとも、急かねば

アフト、になるけれど——。  
いつたい、孰つちを探つたらいつのだ  
い。

四

文樂座の塚本満壽江といふひとは、ゴ  
自分では日本一の美人と思つてゐる、？  
とにかく、大阪一の正札ついたイトは  
んに相違ありません。

ゴゴ、北區から青バスに乗つてきて卓  
上デンワ片テに黄色の圖板へ紫と紅の  
シルシをうツたところはスツカリ滿洲國  
のお正月デス。

大阪城と、鴈治郎と、文樂座を有する  
のは大阪のほこりです、ソノ文樂の錦上  
へさらに華を添えてゐるワケです。

黒檀よりまだイロの黒い、トヨタケ辰  
太夫とて、ムダ口を叩くか、ケイ句を吐  
かねば氣のすまぬ、ソレは〜何から何  
まで中分のないボンチが、マスエさん

のそばへよくきます。

「……………、いつべん、こつちへ向キ

なはれ」

「知らんワ」

「アクシユシまほ」

「しらんワ」

「ワイ、いんまに、日本一の太夫はん  
になりまんねん」

「知らんワ」

しかし、イロ男の部に屬する辰太夫、  
却々ソんなことで屁古垂れて、ストライ  
ク、アウトの黒屋を記録するひとではあ  
りません。袂からシユークリームをだし  
て。

「コレ、知つてなはる？」

マスエさんの腦の細識は非常トクベツ  
に巧くできてゐます。

「知つとるワ」

雀躍してテテでした。

「猫いらズが、スつてんのに……………」

「かめへんし」

とられ損。(挿繪 妹脊平三)



# 大西氏の所謂國粹レヴューに就て

羽 仁 六 郎

樂劇部に歸り咲いた大西利夫氏が、新しい角度から、レヴューを通じて歌舞伎を見直すと云ふ見解——その第一作「女鳴神」に自分は恥かしい程大きな期待をもつて居た。だが、出来上

つたものは、私の獨りよがりな期待の爲めか、饅頭にキヤビアを塗つて食はされた様な氣がして、思はず、無遠慮、不行儀に吐き出したのが此の一文である。

小林二三氏は古くから新しい國民劇の確立を提唱して居た。歌舞伎を、近代的な、大衆的な少女歌劇の中に見直さうと云ふのである。

この線に沿つて久松一聲氏等が「燈籠島」「お夏笠物狂」「娘道成寺」等々を作り、小林氏自身も「八大傳」をものした様に記憶するが、これ等一聯の作品は小林氏の所論を具體化しやう

とした(?)と云ふ外に、當時の脚本飢餓の穴埋めと云ふ一面も確かにあつたと思ふ。

由來日本の新劇は脚本飢餓に逢着すると常に歌舞伎を振り返り、多くの場合此處で本來の目的を忘却して、恰も我國自由主義の發達史が藩閥政治と抗争しつゝ、これと妥協した歴史であると同じ様に——と云へば取り合せが滑稽になるが、全くこんな風に、頭初の敵國歌舞伎と野合し墮落するのである。この例は文藝協會以來澤正の運動等にも屢々見受けられた所であるが同時に大衆は、常に内容の貧弱さを歌舞伎と云ふ言葉乃至には、ひの爲めに簡単に許容し、満足して居たのである。

ところへレヴューが輸入され猛烈な勢で流行し出した、そこ

で寶塚の脚本飢餓もやうやく一時血路を見出し今に至つたもの、此間相前後してレヴューに轉換した松竹ガクゲキ部は製作スタッフに人が少い關係等で、寶塚が行き詰りを廣く暴露する以前に既に行き詰り、他に種々な理由もあつて、身動きがならなくなつたのである。丁度其の時に現れたのが大西利夫氏で、衆望を擔つて起つた氏は、兼ねて好愛の歌舞伎十八番を土臺に折柄流行のファツシヨの流れ、所謂純文學の擡頭、國文學の隆興を見て取つて、こゝに國粹レヴューと銘打つて、歌舞伎をレヴューに依つて見直すと云ふスローガンを樹立されたのであらう。そして大西氏は「これこそ今後の松竹ガクゲキ部を甦生に導くものである」と語られた事があつた。

かくて出來上つた「女鳴神」は、大西氏のあの抱負、あの苦心の結果だとは迎へ思へないもので、大西氏の苦心と吾等の期待とは完全に裏切られた。

これは、大西氏の着想が悪かつた爲では無く、氏の目的の撰定、それに伴ふ手法の無批判、メソドロヂイの皆無等に禍ひされたもので、だからこそ、混然たる融合も無く、バラエテイの

面白さも無く、反も無く合も無き、非辯證法的なものになつてしまつたのである。

筆者が思ふ限りでは大西氏のごよ無き着想を生かすに二つの方法がある。實に何んでも無い事で、

其の一は……新しい内容を古い形式で見直す事で、これには、綺堂、逍遙氏等の或る種の所作に見る所謂新解釋の歌舞伎と、例のエノケンの「黒手組助六」等に見るが如き、内容を茶化してかゝつたものゝ二つの流れがある。

其の二は……古い内容を、新しい形式で見直す事、即ち古い歌舞伎の内容、或はその情緒をレヴューの形で表現する事である。

「所か困つた事には、大西氏の場合には、其の目的が何にあるのやら、いづれの方法に依つて居るのやら、臆然糺糺として居り、従つて多分指導に當つた人達も、暗中模索のかたちで、踊子達と共に大車輪となつて踊るのみと云ふ止む無き事情になつたに違ひ無い。



だから、猿芝居と一般で、せいぜいよく真似たと云ふ丈で何等掬み取る可き價値が無いとの悪罵も甘受せなければならぬ被目になるのである。

吾等は東西氏のこの力作に、坪内博士の樂劇「變化雛」、小山内氏の「國姓爺」、さては猿之助の「春怨」等のしやくしやくたる功績に較ぶ可き何物をも認められぬ事を遺憾と思ふ、一方これ等の人々の過去の遺産に對し、全然盲目であつたからこそ氏がかくも大膽になり得たのではなからうかと思ふ。「國姓爺」の上演に際し、築地連が、古今東西當時迄に我國劇團

が獲得した、あらゆる手法を正確奔放に使驅して専ら精進し、古稀の坪内博士がかくしやくいたる若さを以て、あれ程勇敢に新しき試を行ふ事を得た認識の正確さと、メソドロヂイの妥當さに對し、魅生ガクゲキ部を背負つて立つ大西氏が、何故一べつをも與へ無かつたかと云ふ事が不思議であり、坪内氏と違つた意味での勇氣に感服せざるを得ない。而して最後に氏のこの着想は、一つの試み又は一つの運動としては認め得るも、決して今後のレヴェューの本流をなすもので無い事を明らかにして置く尚ほ大西氏を坪内、小山内兩氏に並べて論じたのは筆者の心からなる尊敬である。

# 大阪商業新聞社

大阪市北區空町一丁目  
電話北二五八〇番

支店 東京・神戸・奈良

# 謹賀新年

昭和九年元月

道頓堀編輯部

## 編輯後記

明けましてお目出度う御座います。奉祝の聲に満ち充ちた昭和第九春を迎へて、すべてものに活氣旺盛の感があります。吾が關西劇壇も新なる構えもて、新春の第一陣に臨みました。

先づ中座の大歌舞伎に古典復興の近年に珍らしい様式の初芝居が演ぜられることです。劇場及び芝居茶屋の表飾りの古式復活、景事手打芝居、南總里見八犬傳の上場、加ふるに鷹治郎の近松物として定評のある心中宵庚申の上演等、意義ある企として必ずや皆様の御満賣を得ることと思ひます

そこで本誌もこの機會に大々的に大阪歌舞伎に對する聲援なり批判なりを、凡く識者諸君から仰いて大阪劇壇特輯號を華々しく發行する計畫を致して居りましたが寄せられた原稿の数が誠に僅少にて遺憾乍ら來月號に掲載の止なきに至りました。寛小石先生、新妻伊都子先生、大島多慶夫先生、豊岡佐一郎先生及び讀者皆様深く陳謝の意を表すると共に必ず二月號を御期待下さいますやう御願ひ致しておきます。

—— 滿彥生 ——

昭和九年一月一日發行

月刊「道頓堀」第九年  
第八十八號

◇誌代口前金でお拂ひを願ひます。

◇郵券代用は割増にて御註文を願ひます。

◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和八年十二月卅日 印刷  
昭和九年一月一日 發行

大阪市南區難波新地三番町

發行者 鳥江 鎮也

共同編輯 山上 貞一

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

# PERIN



適應症

凍傷・皮膚裂瘡（ヒビ、アカギレ）、火傷、汗疹、濕疹

ペリンノ長所

- ◇塗布ニヨル爽快ノ氣分ハ他ノ追隨ヲ許サズ
- ◇膠樣質ガ主成分ナレバ其成分ガ沈着シテ表層ノ皮膜形式ガ行ハレ皮膚ノ保護ニ申分ナシ
- ◇ワセリン、脂肪類ヲ含マザレバ塗布後、食器食料品ヲ取扱フニモ不潔、惡臭等ノ附着ノ憂ナキハ本品特長ナリ

▼容量 一五cc 三〇cc 一〇〇cc  
二五〇cc 五〇〇cc

大阪市東區伏見町三丁目

製造發賣元

光榮商會

電話本局三三二一五番  
振替大阪三三一七番

昭和八年十二月廿五日  
 昭和九年一月一日  
 第三種郵便物認可  
 第一號  
 每月一圓  
 發行

# 陣畫映春新 マネキ竹松

演主 郎二長 林・一キート・ルーオ

## 郎次時掛沓

シオフ竹松式橋土・作原氏伸 川谷長  
 影撮平公山杉・督監色脚助之貞笠衣

督監 郎太金上井・一キート・ルーオ

## 多喜次彌

演主 郎太好東坂・郎二長林  
 演助 郎四重林小・郎二章原笠小・子敏塚飯

品作督監 亭芳村野・版ドンウサ

## 春の戀初

雄達藤齋・傳方日大・一其内竹・二讓岡  
 子蝶田飯・子芳田川・貢井藤・雄禮宇川江  
 子夢初逢・子嘉田岡・子弘崎川・子惠理雲八  
 演 共・子美内坪・代君塚大・子澄保久水

督監 原脚 果西波志・作大ロブ太右

## 代時風颯

演主 門衛太右川市  
 演助 子鶴富塚大・枝絹川歌・典國堂高  
 演出 援應 郎四妻新・明光南

督監 助之平所五一キート・ルーオ

## やにらかたれ生と女

雄禮宇川江・子澄保久水・子蝶田飯  
 雄達藤齋・武本坂・貢井藤  
 子夢初逢・二健山大・二九十林小

督監 信義田池・版ドンウサ

## てけ更は夜の樂歡

子雪波筑・子嘉田岡・子みす島栗  
 武本坂・傳方日大・人草山  
 演 共・子葉櫻小・雄達藤

版華豪超の前空竹松一キート・ルーオ

## 母の洋東

督監 宏水清・揮指總郎四戸城  
 演出 總劇歌女少竹松・茂加・田蒲

「道頓堀」第八十八輯 第九年一月號

一部 金夢拾錢